

対談

その時、 大阪教組は

全ての行政機構、全ての組織、個人がその危機管理能力を問われた。

一切のマニュアルが無い中、大阪教組は、先ず、兵庫、そして大阪の被害状況の把握から始めることとした。

そして、救援物資支援、被災して転入してきた子どもたちへの援助、組合員への救済措置、教育復興ボランティア……。考えられる全てのことをやり切った。



「たいしたこともないと 思ってまた寝たんですわ」

—— 樋口書記長

新居：七カ月も経っているのに、記憶を呼び戻すためにも一月十七日の午前五時四十六分の自分がその時どうだったのかというあたりから、最初は話に入りましょう。樋口さん、どないやった？

樋口：私は風邪ひいてましてね。大阪教組の冬期セミナーがあつて、その後十五・十六日が連休ですつと寝てまして、十七日ももう一遍寝よと思ってた夜明けでしたね、ガタガタと来た。たいしたこともないと思って奈良県の家でまた寝たんですわ。そして今日は休むという連絡を入れようと思ひながら寝てました。そんな状況です。

平沢：私の家は富田林市の金剛です。から揺れはひどかったにしても物が倒れるということはありませんでした。それでも大変だろうなと思ひ、すぐにテレビをつけました。そうしますとNHKのアナウンサーが「大変だ、大変だ」とやつて。その時間から何度か大阪教組に連絡を入れようと思いますが、電話がつかない。さらに電車がその朝から完全に止まってしまった。そうこうしているうちに書記の三木さんが連絡を取ってくれて、「いま書記局には私と滝本さ

んがいます」。「なんで滝本さん居んねん？」と聞きますと、滝本さんは書記局で地震に遭ったということがわかりました。連絡もつかない、行くこともできない、というのが十七日だったですね。

新居：僕は箕面やから地震がきつい状況で、最初に報道されてるようにドーンと来て、それからしばらく横に揺れて、後から考えたらそんな長い時間やないんやけども、自分の体験としてはその間非常に長い。恐ろしい。これで僕は死ぬんかなと思つたくらいで。そこへベッドの横に本棚があつたからこれは死ぬかなと思つたけれども、とりあえず表へ逃げた。下へ降りていつてちよつと落ち着いてからもう一遍上へ上がったら、自分のベッドの上に本棚から本が全部散乱してた。ちようど頭の所に本棚があつた。

下は下で食器棚が観音開きで中から落ちて、気が付いたら自分自身が怪我してるという状況だった。だけどまあ仕事には行けるだろうなと思つて着替えた。けれども電車、バスが来ない。朝六時に田舎に電話かけてお互いに安否を確かめたんだけど、七時から

う繋がない。電話がダメ。それからガスがダメ。一週間くらいなかつたかな。二日目、いよいよ出て行かないかなあ、電話繋がないから行かないかなあと思つて家を出たんやけども、普段は千里中央まで行くバスが一七一がずーっと詰まってて、石橋の高架がひびがはいつて、それを知らんと車が集中したもんやから一七一が停滞して、バスが千里中央まで行かない。それで千里中央から箕面行きのバスに乗り換えたんやけども、普段は五分か十分くらいで行くバスが二時間三時間とかかる。これはもうどないしようもないというので途中で降りて家に帰つた。これが二日目。三日目は、もう地下鉄御堂筋線が動いとつたのかな。それがわからんかって、けっきょく北千里の方から行つた。そんな状況だったから、その間電話も繋がらないで大阪教組で何がどのようになつてゐるかわかん。その辺の、僕にとっては二日間という枠なんやけども。立ち上がりやね、大阪教組の。それがどんなか。**樋口：**十八日に執行委員会やね。その時点で対策本部をつくつて。兵庫と連絡取れるかということ

樋口 浩 (大阪教組書記長)

平沢保人 (大阪教組書記次長)

新居晴幸 (大阪教組教育文化局長・司会)

平沢さんがだいぶあちこち電話してくれて。小西さんがつかまつたんですが、何支部やったかな姫路の方ですわ。とにかく一応それで連絡パイプは付いたということで…。

平沢：とにもかくにも事情把握をしよう十八日朝集まった。まず大阪教組の執行委員や書記、日教済の職員の安否は。組合員の安否は。兵庫はどうなんだ。その頃は兵庫の石井委員長の安否も把握できていなかった。確か僕、この日の午後、風邪引いて熱を出して帰った。家に兵庫から連絡が入って、兵教組書記次長の小西さんが三木支部にいたことが分かった。「石井委員長も田治米書記長も生きてます」と。ただその頃はまだ書記局のうち何人か兵庫県教組も安否を確認できないというのが十八日だったですね。

新居：記録を見ると十八日だけではないもう精力的に動いとるな。まず緊急中執会議やって、僕はそれにいられてない。で、いま平沢さん言うたように府内の被害状況の調査。この時もうカンパやらないかなということ決めてるみたいやね。それから教委との折衝。特別休暇の話したり、もし府

内へ受け入れ出てきたらどういすんねんという要請したり、共済組合に災害見舞い金とかの手続きの簡略化を要請したり、互助組合へもそれを要請したりというのは、記録を見るとこの十八日だけでない動き始めてますね。

平沢：せんといかんなあと言うたんかもしれないね。十九日にも臨時中執やつてるんですよ。

樋口：二日、連チャンで中執やつてますね。

岩手から水が来る、 鹿児島から食料品が 来るという話があつて

新居：その時に救援物資の話出てきたん？

平沢：その頃に岩手からペットボトルに入った飲料水が、鹿児島から食料品が来るという話がありました。十八、十九日あたりから話があつたのだと思います。兵庫に送る方法が分らない。ところが岩手は荷物を送った、鹿児島も船が出たと。実際はどっちもまだ出ていなかったのですが、僕らがトラックを何とか手配した頃にはまだ

荷物が着かないという状況でした。
新居：水やろ。水と野菜かなんか。それ送るんだつたらそれ以外の物でも、言うてコンロとか…。

平沢：それは第二陣ですね。

新居：ああ、第二陣か。その頃に向こうの様子がどうなんかということ、市教組の酒井君が見について…

平沢：自転車で、見についてますね。

新居：十九日、同じ頃に東大阪の合田君が南港から船に乗って現地入りして写真を撮ってきてる。それが十九日ごろ。そのコンロは…
平沢：コンロはその後ですよ。二十四日からの第二陣なんですね。

第一陣は二十一日に泊まって二十二日早朝八時に出発した。二十二日、現地へ送り込んだのは岩手県教組の水。まあ水ってこんな重いものかと思つた。それと、鹿児島高教組の有志が野菜などをくれた。大阪教組としては現地と話をして何が欲しいと聞いた。困っているのが生理用品、ティッシュペーパーやトイレットペーパーがないという。「よっしゃわかつた」と二つ返事をしたのはいいんですけども、大阪でもスーパーや百貨店を

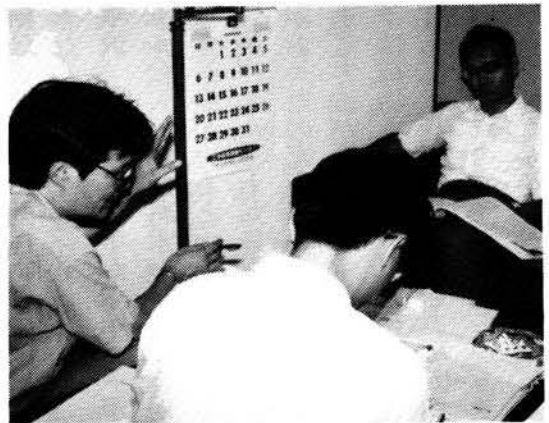
かけ回ってもない。学校は大変ありがたいところで、学校出入りの業者に頼んで、どんなんでもいいからもって来てもらった。トイレ、トペーパーや生理用品、手に入るのだったら欲しいというのが兵庫の要望でした。

二十二日は震災から数日経ってたということ、品物の送り先が西宮の配送センターという神戸や西宮の市内から相当離れたところでしたので比較的順調に、四、五時間で着いたのですよ。これが第二陣の輸送をやった時の失敗に繋がるのですが、極めて順調に西宮の配送センターへ入って、物を全部下ろした。そして神戸市内へ向かった。神戸市内から大阪へ帰ってくるほうが逆に時間がかかったのです。その時の教訓、これから先の教訓にもなると思いますが、被災の中心へ物を送っても意味がない。少し離れたところで、冷静なものが見れる所に拠点を置いて、物資輸送はするべきだなと思いました。今回は最初からうまくいった。直接兵教組へ送り届けたとしても、腐らしたり配送できずに山積みになっているだけということになったと思いますね。

新居：第一陣が二十二日で、田淵委員長自身も一緒に行ったん？
平沢：田淵委員長は電車で行った。
樋口：田淵さん、日教済の奥村さん。日教組からは戸田さんと山本さんが来た。

日教組が大阪に 現地対策本部を 設置したいと

新居：その頃に日教組の方が、大阪教組に現地対策本部を設置したいということを決めはったんやな。
樋口：そうです。戸田書記次長が兵庫の出やということもあって、戸田書記次長を現地対策本部長にするということ。二十日くらいにはもう入ってはったからね。
新居：先遣隊みたいなもん？
樋口：もう大阪に事務所借りたいと。正式に発足したんは二十一日。
平沢：その時僕らと一緒に戸田さんと山本さんが行った。車がワゴンを含めて三台で走ってますからね。
新居：二十日にうちで現地対策本部ができて、二十一日から実際にその対策本部が活動を開始して、



二十二日に一緒にもう現地視察兼ねて行ってる。
樋口：うちが直ちにお見舞いに行ったり状況見たりせないかんと言ってもって、けっきょくその岩手の水と鹿児島県の野菜と待って一日遅れた。それに合わせて委員長も日教済も日教組も初めて現地に入ったこと。これが二十二日ですね。
新居：同じ日に夕刻から、緊急単組支部代表者会議を開いている。
樋口：十八日にただちにカンパ活動に入るということを決めてカンパ袋の印刷に入った。もう十九日には取りにきてくれた単組がわりとあったね。取りにきた所は十九日からもう分会でカンパ活動が始まってる。

新居：十八・十九いうたらかなりもういろんな手打ってんねんな。
樋口：まあ、今にして思えば賢いねえ、ずいぶん多方面に手を打って。

新居：だから、今僕が記録として見ている緊急号外は二十三日付けなんよ。ということは、この緊急号外を作れということは指令はもうこの頃に出てるわけやなあ。
樋口：十九日にね、その作業に入ってると思います。

新居：僕も久しぶりにこの新聞づくりに参加してん。この段階でこれを見てみると、もうその段階で市教組の畑中先生がお亡くなりになって。ご夫婦で一階に寝てて一階はつぶれて、お父ちゃんお母ちゃん二人とも死んでしもうて子供達が二人、二階に残ってて生き残った。で、写真も入れてそのニュースを出していくと。
樋口：市教組の北大阪の田村書記長も、マンションが壊れて一家放り出されてしまうというような情報も入ってましたな。で、二十二日に単代をどうしてもやらなアカンということになったのは、連合大阪のボランティア要請ですわ。連合大阪のボランティア要請が来



まして。これは二十一日の土曜日に連合もお休みのはずなんだけれども、電話がかかってきてボランティア派遣をしないと。大阪教組にも当面二十日間五人づつくらい出してくれという要請がきましてね。これはちよつと電話とファックスでは無理だから単代をやることになった。もうそれまでに各単組の被害状況の把握というのはほぼできてましたから、二十二日の単代でそれらの交流をする。

日教組の現地対策本部も来てましたから、日教組の現地対策本部からもアピールがあると。それから兵庫へ行った第一陣が帰ってきたから兵庫の状況も話をしてもら

うというプログラムでした。

二十二日、日曜日なんです。日曜日の夕方から単代やって二十三日から連日十名のボランティア派遣体制を整えた。二十二日には明日の朝一番からボランティアを派遣できる体制をとってくれという電話連絡をずーつとして、だいたいOKになった状況を持って単代に集まってくれたという状況ですわ。

その単代、非常に積極的な意見が多かったですね。もつとあいうことができないか、こういうことができないか。たとえば子供のホームステイ、疎開の受け入れを大阪教組あげてやったらどやとかいう。結果的には、子供だけをよその家に預ける、何ぼ学校の先生でも預けるというような要望は現地にはあまりなかったんだけど、できることは何でもやらやというような気分の単代だったので、その後、形は違ったけれどもいろんなことができるように発展していった。まあ率直に言うと、大阪教組本部が想定していたよりも現場は救援に向かって燃えてたという感じでしたね。

新居：この連合大阪の救援ボラン

ティアの時は、主に王子公園で救援物資の搬入作業を手伝うと言うことで…。

樋口：自衛隊のヘリコプターが荷物降ろすわけよ。それをトラックに積み代えるという。荷物の積み下ろしでギックリ腰になった人や、帽子飛ばされた人とかいろいろ居たけれども、行った人たちは直ちに体験記を書いてね。単組の機関紙とか学校の学級通信とかにずーつと下ろしていつてね。拡げていきました。

新居：その頃に大渋滞の中で：

平沢：その頃、僕がやった仕事は、日教組から来る人の宿の確保でした。アウイナ大阪に何とか無理をしてくれとたのんだ時には被災者でもう溢れ返っていた。それから、書記局が二十四時間営業中という感じで夜食の世話とか。兵庫のライフラインもさることながらこっち側のライフラインの確保も…。

それで二十二日に物資を届けて、「次何欲しいのか」という話をした。このあたりから要求が変わってくる。十七日は水が欲しい、握り飯が欲しいという状況から、生理用品とかが欲しいという次の要求。二十二日に行った時には「温

いもんが食べたい。卓上用ガスコンロはあるけどボンベがない。何とかしてもうたらほんとに助かります」と言われた。帰ってきました二十三日からそれを何とか確保しようと努力した。百貨店にはない、スーパーにない。ということとで定価でも買えない。そこでいろいろと知恵を巡らして出てきたのが大阪のバツタ屋。定価販売でなく安くした値段で売ってくれた。「入ったら連絡したる」ただし数量制限で、「二人がごっそり買いたらいかん」という。一人が買いに行ったら今度は人変えて買いに行くということで、三本組のボンベをトータルで二千本余り手に入

**水が欲しい、握り飯が欲しいと
いう状況から、次に生理用品と
かが欲しいと**



れて、ガスコンロも安いもんから高いものを含めて確保した。そのガスコンロは兵庫だけじゃなくて豊中や池田の希望者にもお送りをした。

何とか荷物が揃ったのが二十四日。二十四日に米田さんの友達のトラックを借りて、ポンペを満載して出発した。二十二日あまりに順調に行っただけでタカをくくって走りだしたら、池田あたりから渋滞がひどくて、川西能勢口からまったく動かなくなった。時速1kmという状況で。私達の食料を持っていくことは持っていたんです。が、お握りを食べてパンを食べて、無くなる。時間はどんどん過ぎる。コンビニエンスストアは開いていたが、カップうどんを買って「お湯下さい」言ったらお湯がない。考えてみたらこちら側ガスコンロは思いっきり積んでるわけですか

救援にいった私たちを 救援に来てくれた

ら、道の真ん中でガスコンロに火を付けて自分等の食料調達をした。それほど渋滞になった。そうこうしてうちに近づき日も暮れて、西宮の配送センターの方も待っているけどいつまで経っても来ない、こっちも行けない。さすが地元ですから小さい車で、救援にいった私たちを救援に来てくれた。

逆方向、大阪へ向かったらいくらでも走りますから、救援部隊が救援してもらおうという不細工な状況が第二陣の物資輸送だったですね。

その時怒られました。が、私ら素人ですからポンペを山積み、満載していったら専門家の人に「何ちゅう危険なことすんねん」。よく考えてみましたら「危険は危険やな生きて帰ってきて良かったね」と。第二次以降は物流も少しましになってきましたので、直接大阪教組などが品物を送るということはありませんでした。

物資輸送で、バツ屋をかけずり回った時に、髪の毛の長い若者が同じように走っている。「僕も

何回か兵庫行ってきた。皆さんも荷物運んでるようですから、いるもんがあったらどうぞ持ってきてください」というのを聞きまして「ああひょっとしたら我が日本も二十一世紀にも元気で行けんのんちがうかな」と妙な感心した。バツ屋巡りの時のエピソードです。

樋口：これが一月の二十四日やな。新居：日教組の全国教研がいつから始まつとるんだった？ 二十七・二十八日とか。食料と学用品を配るとかいり取り組みは？

樋口：もうちよつと後ですなあ。十八・十九日あたりからまず問題になったのは教職員の休暇の問題。休暇というか、もう出勤できないという、交通遮断と住居の滅失の類い。出勤できないことの扱いをどうするんだというような問題。まあそれは特別休暇にいたしましたというようなことが、すでにもう十八日段階で確認できてるんですね。で「それは何日や」「必要な期間や」いうようなことができて。それからさつきあったように、共済や互助組合での対応と。子供の問題が非常に焦点化されてきたのは、これも十九日段階。

新居：早い時期やな。すぐやな。十九日にはもう転入者あったん？

就学援助費の適用は、 みな非常に早かった

樋口：ええ。ちゃんとした調査は、もつと後だけれども次々に転入の情報があつて正式書類抜きの転入手続きをどんどんやるように、いう通知が文部省から十九日にもう出てる。

府教委も市町村に対してその種の通知をやつて、どんどん転入生が出てくるけれども、その子たち何も持っていないというのが問題になってきたのが二十日過ぎなんです。数字が初めて出てくるのが二十六日の対策情報⑥で二千五百人を突破してあるねんね。二十六日の十時現在、すでに二千五百人を突破している。大阪市を中心に府下全域ですわ。で、これについて各学校、地教委と協議をした上で問題があれば大阪教組に集中して下さいというふうにして、いろいろ聞いた。聞いていろいろやってみると、一つは就学援助金だけでなくスジとしては三学期の途中入学で、その学用品費ゆうたら微々

たるもんで二千円とかそのくらいしか出ない。それから災害救助法……

平沢：最初に考えたのは災害救助法でした。

樋口：災害救助法を適用されたらどうなるか。いろいろ調べてみたら、その土地で災害を受けて、その土地で学校行つてて学用品が無くなったと。だから神戸で災害受けて神戸の学校行つてる子供は対象になる。豊中において豊中の学校行つてる子が対象なんで、兵庫県からたとえば東大阪市へ来た子は災害救助法の対象にならないということがわかった。

それで平沢さんと僕と府教委へ行つて、義務教育課長とあいう方法はないかこういう方法はないんか、この法律はどう読むんやということギリギリやったんが二十四・二十五日頃。その場でコクヨ労組と電話でやりとりしたんですわ。兵庫で被災していわゆる疎開してくる子供が絶たない現状で、この時点で三千人超えている。この子ら着の身着のまま、ほとんど学用品らしいもの何も持たんと来ている。何とかコクヨ労組と大阪教組で連携してこの子達

今の法律で何とかするのは難しい それで、「コクヨ」の連帯が……

の支援ができないかという話を申し入れた。感心したんやけど「非常にありがたいお話でございます。私も会社を通じていろいろやつてくれるけれども、それは兵庫県のセンターの方へ寄付するとかいう形であつて、大阪へ来た子供に、しかも現場で直接役に立つ形で何かをするというようなことは、そういう問題の時にコクヨ労組を思い出して戴いてありがとう」ということで、コクヨ労組も非常に前向きに受けとめてくれた。

新居：平行してあつてんね。行政に何をさせるか、と同時に。これはまあ、大阪市がごつつう早いね。新居：一月二十三日付けで学務課長が「特例でやれ」て出してくれて……

樋口：その大阪市の一万円の口か。樋口：あ、それはね。就学援助費の適用の要項そのものは、どこにもみな非常に早かつたんです。早かつたけれども金額がね、新入生の就学援助については、入学支度金等々で二万五千円ほど出るん

ですが、月割りでくれると一ヶ月二千円足らずというオーダーで、そこは渋かつたんですずっと。

平沢：文部省の動きを褒めるべきだと思ふのです。それは後になつて調べてみると、一月二十日にもう通知出してる。その中で、「早くかつ弾力的な活用をしないさい」と。そして二十五日にさらに今書記長が言つた通り追加の通知を出した。通学費、および新入学の学用品費等については、いずれの学年においても支給対象になる特例を設けたというような通知を出してるんです。ところがこの通知が……

樋口：詰まつとつたんや。

平沢：理解を含めて、下へ降りない。大阪市はこういう情報がダイレクトに入りますし早い動きになつた。まだ最後まで「そんな取り扱いできません」などと言うと市があつて、逆にこっち側が「文部省がこんな通知出してますよ」と言わなければならぬ状況もあつた。

新居：各単組が、このことでのいろいろ交渉、折衝を各地教委とやつてくれたらええのやな。

樋口：それは一月のコクヨ以後です、だいたいが。

平沢：書記長と私が教育委員会に行きまして府で何とかできないか要求した。ところがどう考えても今の法律上で府が何らかの対応をすることは難しい。それなら私たちがやりますと最初僕らが思つたのは多くても五千入位。仮に千円分の学用品としてもそんな大きい金にはならんと考えていた。結果として一万人分用意しなければならなくなった。行政にも保障させる。我々も微々たるものであつてもできることはやろうと阪神大震災では行政も今まで考えられなかつたくらい応えてくれたし、我々もその中からいろんな知恵を出していった。民間の労働組合で大阪に本社があるコクヨ労組も大変意気に感じてやっていただきました。樋口：電話したのが夕方で明くる日にはもう決定をして、向こうの集配センターと在庫管理責任者も含めてもう話ができた状態で。あれ、僕と平沢さんが行つたのかな。行つて向こうの委員長、書記長と



話ができで。それが二十六日やったか。すぐ話がまとまった。

樋口：だから行政的なでたと、それから教組運動としての手立てと。各単組で自分とこの主任手当てを含めて、教職員組合として一人あたたま五千円までとか一万円までとかいうような学用品支援をやったところも十数単組ありますわな。

新居：そういうことで行くとコクヨとの連帯もそうやし、各地教委なり府教委と我々教職員組合との関係もそうやし、兵庫には申し訳ないけども、隣が大阪であったということはやっぱり…

就学援助金にすぐ目 がいったというのは、 やっぱり大阪の解放 運動の伝統が、事務 職員部にある

樋口：まあ、大阪はそれなりに人権教育の伝統というかね。来た子供の即日勉強できる体制どうとらんかということを非常に現場的に考えることができた。だから行政も就援で弾力的に対応したということ、特例的に運用したということと、それ以外に、就援以外にすべての子供に五千円とか一万円とか出していますわ。そういう所が多い。市町村でね。行政はそういうにしてる。

それから教組とコクヨ労組、それから教組単独の学用品補助、そないして子供たちにとりあえず体だけ来てくれたら勉強できるという体制をすべての学校でとった。そういうところは、なかなかないしたもんです。

平沢：就学援助費にすぐ目があったということは、やはり大阪の解放運動の取り組みだと思ふ。他

県では就学援助費は学校の仕事でない。市の仕事だいう感覚がある。

しかしやはり学校現場で子供の状況にに応じて就学援助するという運動の中で培ってきたノウハウ、それが今回の地震でもバツと生きた。

「家無うて来てる子やったら、すぐに就学援助費出したらんかい」と言うような発想になった。それはやっぱり大阪の運動の伝統だと思ひます。

新居：コクヨ労組ともすぐに連帯、連帯ができる。連合大阪ということできつきのボランティアが派遣できるという大阪の長い労働運動の歴史の分厚さみたいなもの。やっぱりある。就援活動も含めて。

樋口：それと併せて、この就援問題でパツと氣イついてあれこれ集中したん、うちの事務職員部やっただな。各学校現場からね。この後の就援手続きの問題、額の問題。

平沢：額の競い合いみたいになつた。一月二十九日に、日教組の囑託の南郷さん（元衆議院文教調査室）に来てもらつて理論的な背景、根拠を法律的な面で教えてもらった。

それから同じ時期に国会でも何度か積極的な意味での追求をして

もらっている。

樋口：日教組の政治局。それから兵庫出身の国会議員との連携も、ようやくつきましたね。

新居：高校入試の問題が出てくるのはもつと後でしたかな？

樋口：もうちょつと後ですね。

新居：高校入試の問題なんかが出てくる前に、今度は日教組の教育復興ボランティアやろうという話になってきたんでしょかね。

樋口：ああ、そうですね。高校入試の前後というのは豊中なんです。兵庫が大変だという状況の中で、しかし足元もさつき言うたように、うちの大阪市教組の支部長の家が潰れたりとか、犠牲になつた人がおるとかいうようなことがあつて、各単組で聞いてみると、その豊中で死亡した人がおると。大阪市もおると。八尾には組合員の親が亡くなつたとかいうのがずーっと出てきてて、豊中も十九校が避難所になつてましたからね。僕と委員長が、とにかくやっぱり足元も見えて早よう行かなあかんでというて、行ったんが二十四日ですわ。

新居：豊中へ？

樋口：ええ。豊中の避難所になつ

てる学校へ。豊中市立六中へ初めてお見舞いに行ったのが二十四日。ここで豊中全体が、非常に大変な状況になってるということもよく

わかって、したがってボランティア派遣については、基本的に豊中を外そうと。やっぱり豊中は大変やでと。だから豊中は豊中のことをやってもらって他の者で兵庫へ行った方がええんちゃうかというて。一番はじめの単代の時に、他の、あれはたしか北河内あたりからやったと思うけれども、提起があつて、皆でそのことを了解し合つた。

新居：僕の任務は、その頃は大阪の教育支援ということだね。欠勤が続いてる人の代替はどないしてくれんねん。たとえば池田に、あれ、配置はどないしてくれるねん。あと…

樋口：あれは代替派遣してくれたんですね。

新居：池田はけつきよく病欠の三カ月以上というのん運用せえと。そのの規定でいけるやんかと。あと九五年度の学級認定をどうすんねんとか。そういう話をもうこの頃に始めてますわ。これが後に予算定数を大幅に、そういうことも

含めて十分教員が配置できるようにといい予算案が府議会に出されるって言うことの足掛かりになる。

日教組のボランティア問題が出てきた時に

全面的に参加しようよ。

樋口：それと日教組のボランティア。六日からという話が一日頃から出てきたんですね。日教組のボランティア問題が出てきた時に、全面的に参加しようよと。しかしこういう問題はどうなりますか、と言うて問題提起をしたのは、万一の事故の場合の保障をどうするんですかと。それはちゃんと日教組が面倒見ますと。直ちにボランティア保険に入りました。救援規定は適用してくれますかと聞いたら、もちろん適用しますと。

ま、しかし、交通費を含めて全面自弁やということで、この時点ではそれも止むを得んかなということとで全単組に呼び掛ける単代を持つたのが二月一日。

新居：その単代の時に二月六日からの教育復興ボランティアについて

樋口：転入の子供含めて学級編成きちんとすると。そのための教職員定数配置するという予算確保したわけですね。

ての提起もしてますやん。その時

にもう高校入試上の配慮について、大阪教組的にはもう決着してるんですね。プレスは二月三日やけども。もうその前に弾力対応すると。

提出書類とか調査書の扱いとか。そこまではすでにね。そやからさらに時間延長云々ちゅうんが、その二月三日のプレス発表以降の所の取り組みの中で、障害児の時間延長してるんと同じような取り組みにするとか、そういう話になる。

被災生徒の

高校入試でも頑張った

樋口：兵庫から大阪へ転入してきた中学生が大阪の高校を受けるときには、大阪の中学生の枠を狭めることのないように外数にしまし



ようと。つまり神戸からの転入組に対する一定の配慮は、その時点ではほぼ決まってるんです。

新居：そしたら、大阪で…

樋口：被災をして避難所生活している大阪の中学生については、高校入試でどういう配慮をしてやってくれるんやというのが豊中あたりから提起をされた。それはもつともだというのが、もう少し長にかかっている。

新居：そうですね。その二月当初の段階では、そういうことは高校教育課は全然考えていなかった。我々の取り組みで、最終的に教育次長にまで二人で会いにいったん

やな。

樋口：そうですね。

新居：教育次長の方が…

樋口：ニイさんとで、高校教育課と話をし、義務教育課と話をし、教育次長とも話をし、けっきょく希望する子供については時間延長しますよ、ということを得たのが二月十日。ただそれは結果的には、ほとんどそういう希望者がなかったんだけれども。受験を控えたストレスのきつい状況の中で、家が潰されて避難所生活しなければならぬ。そういう中学生に対する精神的支援、心理的な支援策ということで、大人もみな君等のことを考えてるよ。あきらめたり自棄になったりせずがんばれよという精神的支援という意味で、ええやないかというのが、校長会とかPTAとか組合とか我々が一緒になってやった趣旨でしたね。結果として、その時間延長のために通ったという子供は全然いないんです。いなくても、そうやって皆がオレのことを気にしてくれてるんやなという精神的な支えのメッセージを送ったわけです。

新居：豊中現地にしたら豊中市教



豊中の組合員は豊中の地で頑張

ってくれた。(写真は、府下で最も被

害の大きかった豊中で)

組の本部はよくやったという分会員の気持ちにもつながるね。同じことが豊中で言うたら、豊中の避難所へのボランティアの手配は、豊中市教委が豊中市教組に頼んで、豊中市教組がうまいこと目配りしてやっていくっていう感じで、一番頼りになったんは教職員組合。樋口：豊中の六十校の内十九校が避難所になってる。ただ大半は体育館とかで体育以外の授業に支障があるということではなかった。ただ教職員にしてみたら、一方で子どもが来ている、他方で避難所暮らしをしている人がいる。そのサポートもしなければならぬ。そういう人たちは夜泊まって朝ま

で居るわけだから、夜のサポート体制もとらなきゃいかんというんで、豊中のほとんどの教職員が動いたみたいですね。だから延べの人数で、千九百人くらいの教職員はみんな輪番で、いろんな学校に行ってますわ。

新居：そういうような流れの中で、兵庫の方に毎日教育復興ボランティアということで出て行って、それを樋口さんが一回りしたのかな。

樋口：ええ。僕がやっと動けたんは、日教組の中央委員会の前の日ですわ。やっぱり現地対策本部置いてもらってるし、大阪的にも連日十一校、一日に四人、四十四人派遣する体制をとってましたので。そのことの報告を日教組大会行ったらせないかんという気持ちもあって、十三日と十四日にかけて、うちが行ってる十一校を一通りあいさつに回った。それまでは僕はほんまは十八日から行きたかったけれども行けなかったんですよ。

お前は外へ出たらあかん。

平沢：一カ月経って、ちよつと息がつける感じがありました。

樋口：そう。もう二月六日から派遣したボランティアが基本的な仕事になったから。それは各単組でうまい具合に順繰りに回していつてくれたけどな。

新居：共済、互助の関係。それから府教委の就援やら含めた関係、ある程度…

平沢：だいたい二月のはじめにはメドたつていたですね。

樋口：だいたい順調に動き出したね、二月の初めから。

新居：いろんな諸制度的な面はな。樋口：うん。

平沢：今、服務関係や福利厚生の話が出ましたが、服務関係でも段階がありまして、一月十八日の電話連絡は、「とにかくにも交通遮断で来れない分は、現行法制で処理しなさい」。「とりあえず特休にしなさい」というものが流さ

共済、互助、日教済と、

そののトータルなコーディネートと

いこのを大阪教組ができた。



れます。ところが長くなって、それに対応できないということで、今度は人事院が新しい解釈を出した。今回の地震で新しい解釈や新しい考え方がいくつか出されています。同じように住居が潰れてなくなった。従来どおりの通勤ができな。どうするんだ。という問題に対して、従来の考え方で処理できない部分に対し、新しい考え方を作った。今回我々のノウハウとして蓄積できる部分だろうと思います。

それともう一つは、共済、互助、日教済と、トータルなコーディネートを大阪教組ができた。日教済は最初はそのままで知恵がまわりませんが、そのうち、すぐに潰れた家どうしよう、亡くなった人だけどうしよう、怪我したけどどう

しようということが出てくる。そして、それぞれに必要な特例を作った。しかもそれらについては、いろんな制度が錯綜してしまから、わからない所に対して組合が適切な情報を与えることができたというのも特徴です。教育委員会や福利厚生団体とパートナーシップが作れてるということが、大きく役に立ったと言えます。

樋口：弾力運用みたいなことをね、わりと思ひ切りやらしてるから。**平沢**：教育委員会も思ひ切りやった。「やったらできるやないか」と、思いました。

新居：そういう意味では、違う意味で、我々教職員が、組合員がボランティアに行つて、ボランティア体験することで二十一世紀のそれこそ話が繋がってくるわな。くくりとして、書記長と平沢さんと体験の感想を。書記長。

樋口：はい。改まって言われると。だいたい二月いっぱいくらいまでは夜十時、十一時というのが平気で四月いっぱいはいは休みなしでしょ。選挙もあつたけど。四月三十日をもって日教組の教育復興ボランティアが一応のピリオドを迎えた。それまではやっぱり相当精神的にきつかったということが、五月一日になってわかった。毎日毎日、いつでもうちの、ボランティアが行つてくれてるという…。

は夜十時、十一時というのが平気で四月いっぱいはいは休みなしでしょ。選挙もあつたけど。四月三十日をもって日教組の教育復興ボランティアが一応のピリオドを迎えた。それまではやっぱり相当精神的にきつかったということが、五月一日になってわかった。毎日毎日、いつでもうちの、ボランティアが行つてくれてるという…。

というか生きがいみたいなものを感じた。

それから、大阪教組の組合員が延べ三千人ほどボランティア活動に参加した。この未曾有の大災害の中でね。大阪教組にとっては、非常に将来にわたる財産になるんじゃないかと。やっぱり人間の心のなかに残るものが組合運動の財産だということ。

もうひとつは、この問題については組合員の意欲というか、今これやらなくっちゃということと、本部機能とか完璧に噛み合つた。いい姿の組合運動であつたなあというふうに思います。

最後に、天災は一律に来るんだけれども、被害はその人の持つている生活条件で格差を持つてくるでしょう。障害者を含めてね。そういうものが今日もまだ一万人ですか、どこへも行き先のない、この夏の暑い中で、あの冬の寒い時から避難所暮らしをせざるを得ないというような日本の社会の状況ね。これはやっぱり兵庫の問題とかじゃなくて、日本がどのようにな福祉社会に転換していくんかというのを問われている。たいそうに言うたら二十一世紀への大きな

4月30日をもって日教組の 教育復興ボランティアが 一応のピリオドを迎えた

課題とちやうかなというふうな感じも残ってます。

平沢：やった仕事は子供の条件整備も教職員の条件整備ということ、これに関わってはこんな大きい災害はなかったにしても、災害はけっこうあった。ところが今回、最初一からやらなければならなかった。こんな被害があった時はこれがあるんだ、というノウハウの蓄積が労働組合にもないし文部省にも人事院や自治省にも、十分にはなかった。それほどの大きい災害であつたとは言えるにしても、今回新しく解釈しなければならなかった。それは我々の反省でもあるし相手側の反省でもある。

もう一つ良かった点は、「やつたらできるやん」と言いましたけれども、文部省も、我々以上に機敏に対応したし教育委員会も対応をしてくれた、これが条件整備するにあたって思ったことでした。

樋口：途中やけども、ほんとにそれは、政府にしても教育委員会にしても、子供の教育ということに関わっては、非常に敏感やつたし機敏に動いた。教育委員会と折衝して我々の要求や気持ちと、非常に通じるものがありましたね。

地域の「コミュニティセンター」の

役割りが、

本来学校の役割りなんですよ

平沢：「何とかしたろ」とね。ボランティアで若者も行った。ホテル・アウイーナがね、「六甲荘が水出えへん。水積んで、今帰ってきました。もう二十何時間かかって行きました」とボランティアをやったことが誇りとして言える、みんなも聞けるという関係があつた。「わが国もええ国なんかな」と思った。

学校は本来地域のコミュニティの、中心だと言われてる。ところがこの間その役割りを果たしていなかった。

ところが何の準備もしていないにも関わらず、いきなり兵庫や豊中では学校が地域のコミュニティセンターになってしまった。学校は、子供を避難させる訓練はしたことがあつたにしても、学校が避難所になるという訓練をしてるとこはどこにもない。今回、体育館でも、あんな寒い思いしてもらつたし、給食施設があつても炊き

出できない。ガスをボンベ式にしておけば何とか水汲んできて温いもの作れたに違いない。そういう対応もできてないというところが、大きな反省点といえる。今回の大震災は不幸なことでしたが、地域のコミュニティセンターとし



での役割りが、本来学校の役割りなんですよ、ということを僕らに教えてくれた。そういう教訓をもたないといかんのかなという思いを今している。

新居：僕は、もう単純な感想やけど、組合という字が文字どおりたすけあいという字に見えてきたという認識を持った組合員がたくさんおつて、非組合員の人も、やっぱり組織というもんが、組織があるからこそ、こういう組織だったすごい救援にしても、ボランティアにしても……。組合員増えたところいうんですね。やっぱりそれが一つ大きな収穫あつたなあと。後、何かありますか？

樋口：最後の平沢さんの話を受けて言えばね。明治以来の校舎の在り方、それからこの暑いときにも冷房がないというような姿。学校が今までの考え方の学校というようなものではコミュニティセンターになりようがないのであつて、したがって学校の施設、設備に対する予算のかけ方というのは、おそらく画期的に大きなものにならないとコミュニティセンターになることができないということですから、そういう方向に向かって世

論がまとまっていくのかどうか。現状ではまだまだ声が小さいですよ。抜本的なね、この長期間にわたって、真冬も真夏も避難所として耐えられる学校というふうなものをイメージした場合に、今程度の考え方の教育予算ではどうしようもない。抜本的に変えて二十一世紀ビジョンみたいなものを実現

できるかどうか、が問われているかな。
新居：今チャンスなんちがう？逆に言うたら、日教組がむしろ言うていく。兵庫のこともあるけど全国的にどうしていくんだという。平沢：人間って悲しいからね。喉元過ぎたら、もう何年も前のよう

新居：とりわけ世の中、急激に変動している中の一コマにしてはいけないようになりつつある。次々と自分の意識そのものが昨日へ昨日へ行ってますわね。
樋口：ま、ほんとに兵庫の皆さんご苦労さんや、今も現にな、二月三月段階の我々と同じ緊張を強いられながら、やったはるわけや

らな。私ら五月一日過ぎたら何となくぱっと、こう…。
新居：僕は震災の記録集をまとめるために原稿読んだりしてるからまだ引きずってるけど、十月までは。

資料「月刊 自治研」(95年3月号)に掲載された樋口書記長の報告

自治体間の連携―教育の場面

大阪教組は地震翌日の1月18日に田淵委員長を本部長とする対策本部を設置。兵庫県教組との連絡ルートを確認しつつ、近畿ブロックの他県・高教組とともに、救援カンパ活動や物資搬送を行った。また家屋の全半壊等数百人にのぼる大阪の被災教職員への互助対策や、欠勤、住居・通勤経路変更を余儀なくされた教職員の「勤態・手当」対策、連合大阪のボランティア参加等、息継ぐ暇もない活動にとりくんできたが、ここでは、

「転入生の受け入れ」と「教育復興促進ボランティア」にしばって報告する。

1、教育疎開Ⅱ転入生の受け入れ

①転入生数の推移

住宅被災及び休校等のため、大量の「疎開」生が発生し、1ヶ月余で全都道府県に2万9千人余りが転出した。

最大の大阪の場合、府教委が集計を始めた1月23日に488名であった転入生は、25日に1930名、以後一日に数百名ずつ増えて、2月4日には6002人を数えた。

この時点で幼稚園児284名、小学生5038名、中学生629名、高校生31名、養護学校生20名と、小学生が8割を占めている。殆どは兵庫県からの転入だが、地震による府内間の転校も数十名存在する。

一方転入数日後から、再転出も発生し、卒業式を控えた3月1日には、幼74(転入累計441以下同)、小1595(6087)、中169(885)、高0(67)、養3(58)の計1841(7538)名(24%)に上る程、流動性が激しい。

従って、在籍転入生は2月中旬の6千数百名をピークに、今日では5千数百人台まで減少している。

転入先は府内全市町村にわたっているが、大阪市が三分の一、三島、豊能、北河内、中河内の順で府内の北半分が多い。

②あたたかい受け入れ
各学校では、震災のショックを少しでもやわらげ、仲間になる教育実践が行われた。

「最初はいじめられるかなとか、のけ者にされないかとかたくさんあった。だけど大丈夫だった。たくさんの人が声をかけてくれたり

してすごく楽しいです」(1/30)とか、

「母が何度もこう言った。『神戸の子はこんなひどい目にあったんやから、絶対に、ただで起きたらあかん。日本中の人に助けてもらっとんやから、強くならんあかん。』」

ほくは今、父の友人のおかげで、八尾市の小学校に通えるようになって、とてもうれしい。みんな親切にしてくれる。この感謝の気持ちをもち続けて、いつかほくも、人の役にたつことをしたいと思う。」(2/5)等、感動的な思いが届いている。

又、新しい学校の友達が元の学校の仲間に手紙を書いて転入生のようにすを知らせたり、カンパを送るなど、転入生を仲立ちにした兵庫Ⅱ大阪の学校間交流も多数生まれている。子ども・PTAによる救援カンパはほとんどの学校で行われた。

府教委は、どこの学校のどの子が今大阪のどこの学校に入ったかの情報を兵庫県教委に送り続けている。

こうした、人間の温もりのある受け入れを可能にしたのは大阪の

同和教育の伝統であり、同時に行政・学校・PTA・教組等関係者を上げての支援策である。

大阪教組はこれら全てに関わったが、紙数の関係もあり詳細は省く。

③就学援助制度の弾力適用
被災者に所得制限なしで就学を

適用し、月割り等による学用品費や給食費の他に、全受給者に新入学並の入学準備金(小学生18900円、中学生21800円)を支給した。

④市単費の学用品支援

我が各単組の要求等によって、市単費で、

大阪市の「1万円」等、十数市で転入生全員に数千円程度の学用品支援が行われた。

災害救助法が適用された大阪の5市の被災生に対する学用品支給の制度もあった。

⑤コクヨ労組と大阪教組による緊急支援

異例の迅速さだったとはいえ、行政的支援はやはり時間がかかる。多くの子どもにとっての最初の支援は教組とコクヨ労組によるものであった。

直ちに共鳴してくれたコクヨ労

組と大阪教組は、1月30日には被災転入生にノート、シャーペン、消しゴム等の学用品セット(1110円分)を「地震に負けるな！君たちのサポーターより」とメッセージを書いた袋に入れていれて贈り、今日まで約9千人の被災生に配布した。

また大阪・吹田・八尾等各市教組は、2万円の学用品代を教組として独自に支援した。

⑥高校入試の時間延長

受験を前にした追い込み期に思いもよらぬ災害にあった中学3年生を激励するために、大阪教組と「豊中の子ども達の進路を保障する会」(教組・PTA・校長会等)の要請によって、高校入試の時間延長等が実現した。受験料・入金・授業料の減免措置も行われている。尚、兵庫からの転入生の合格者を、募集数とは別枠にカウントする措置も取られる。

Ⅱ、教育復興促進ボランティアについて

私たちは1月23日より連合大阪ボランティアに延べ106人を派遣し、2月6日から3月5日まで、日教組の「教育復興促進ボランテ

ィア」に延べ2千人、更に3月末までに数百人を派遣する計画である。

避難所になった学校では、震災以来、教職員が不眠不休で活動してきた。大阪教組は日教組ボランティア(24校担当)の主力として11の学校(神戸6校、西宮5校)を受け持ち、毎日1泊2日、3人1組のボランティアを送ってきた。昼間は6人体制である。

派遣先学校の校長の指揮下に入って、給水、環境整備、配食、物資受け入れと仕分け・配分、受付・電話番号等、「口は出さずに身体を動かしてきたが、いちばん歓迎されたのは、宿直であった。」「これで、3日に1回の当直を1週間に1回にできます。被災した職員もいるんですよ」と目を潤ませて喜んでくれた校長の言葉が、当ボランティアの性格を端的に示している。

「職務専念義務免除」でボランティアを派遣する各学校は、二日間の休み中のそのクラスの授業分担をし、救援物資や子どもから子どもへのお手紙を用意し、中には本人へのカンパまでして送り出した。

樋口 浩(大阪教組書記長)

1月22日午前8時 大型トラック2台とワゴン車で



震災発生後、兵教組との連絡がとれない状況にいらついていた大阪教組執行部、解放共闘事務局会

議に参加した田淵委員長、米田がこの会議に参加していた全通委員長の中村さんから「全通は、バイク部隊を編成して避難所に救援物資を輸送している」との話をきく、大阪市教組からは酒井聖執行委員が自転車で兵教組本部まで行き現地の状況の把握をおこなう、この時期を同じくして、日教組現地対策本部が大阪教組内に設置される、岩手県教組、鹿児島高教組から救援物資が大阪教組宛に送られてくる。大阪教組として義援金カンパだけでなく救援物資輸送にとりくむ事を決定する。救援物資集めは、平沢書記次長を中心に進められたが、現地に必要なものは、大阪のスーパーからも姿を消していたが、いろんなルートを使ってかき集めた。

鹿児島からの物資は、南港に着くトラックまで受取に行く、岩手からの水は大阪駅のコンテナヤードでコンテナごと日通さんに受けとってもらう。

第一陣輸送部隊は、日教組戸田書記次長、大阪教組平沢書記次長を団長に、1月22日午前8時に大阪駅北口の日通事務所前を、大型トラック2台とワゴン車1台に

救援物資を満載し出発した。西宮北インター近くの兵教組救援物資集積基地で荷物をおろし、兵教組本部からの出迎えの方と合流し、一路元町の兵教組本部をめざす。道路事情を考え3食分の食料を用意したが、国道2号線を通らずに行けたので12時すぎには兵教組本部に到着する。すでに大阪教組田淵委員長が到着していたので合流し、兵教組石井委員長から現地の状況をお聞きした後、救援物資の贈呈が行われる。米田は1月7日に兵高教の旗開きに来ていたのでこの日、眼にした光景はたいへんショックなものでした。帰路、国道2号線の状況も惨憺たるものでした。第二陣の輸送は、大阪教組単独で行なう。都市ガスの復旧が大幅に遅れる見通しから、カセツトコンロを送る事にする。

大阪市内でもなかなか見つからなかったが、大阪名物バッタやさんを回って最後の1軒で見つけ、何名か顔を変えて買いに行き、3・5tトラック1台満載にする量を確保する。輸送は一陣のメンバー、平沢、米田で行なう。トラックは、斧田木材さんの好意で無料でお借りする。第1回目の輸送が快調だ

だったので、食料準備もせずに1月24日の午後2時に教育会館を出発。池田あたりから渋滞がひどくなり、川西能瀬口から全然動かなくなり1時間で1kmという状態になり、途中で大型トラックが道の中央で止まったまま眠っている。運転手が倒れていたらと思ひ運転席を覗くと、疲労で熟睡している。10時になっても山本までしかつかない。このままだといつ到着するかわからないので、兵庫の救援物資集積基地に連絡をとり、兵庫の方が抜け道を知っているとの事なので、「山本」でドッキングして荷物を渡して終了する。

米田 彰男

(中央執行委員)



日教済は給付に全力



このレポートは、地震発生から約1カ月間の日教済大阪支部の取り組みである。

報告 常任幹事 若見 晃

〈その1〉その時、職員は？

●支部長田淵の住居は、豊中市服部本町。豊中も震度6の激しい揺れに見舞われた。部屋の中央に吊り下げられた蛍光灯のかさが左右に揺れて振り子のように天井板にカーン・カーンという音を立てて打ち当る。これではもう家は倒れるなど覚悟した。

地震が収まってから、外に出ると屋根瓦の1/3が破損、ずり落ちていいる。本棚・食器棚は全て転倒し、ガラス製品は粉々になっている。工芸品のガラス細工もあとかたもない。直ちに組合役員や支

部幹部に電話するも不通。

●総務部長の住吉は、五時三〇分の目覚めで起きようとしていたところであった。ドーンと下から突き上げるような音。自動車の事故か何かのようだと思った。今までの地震ではまず横にユラユラ！とくるものだと思っていた。

下階の母の安否を確かめ、薄明かりの中から、食器棚が転倒し食器はほとんど破損していることが分かる。

住吉の住居は、神戸市須磨区横尾、震源地の淡路島北端からは近い。しかし、震度7のあのベルト地帯からは北にはずれるので直撃は免れた。電気・ガスは一〇二時間ほどで回復したが、水道は十日

後ぐらいに復興。しかし、通勤に利用する電車（ＪＲ・私鉄）が全て不通になり一週間、陸の孤島に閉じ込められた。水道がでないためパン屋には何百メートルもの列、2時間並んでやっと一人四個のみ確保。ナントも言えない気持ちになった。

その後、大阪の天保山桟橋と神戸のハーバーランド間に舟便が就航。朝の五時半に家を出て、支部に着くのが一時三〇分。これにも利用者が殺到し2回ほどで利用が不可能に。次に、電車と不通区間の代行バスを利用して通勤するが、当初は5時間、そして次第に短くなり、四月のＪＲの完全復旧まで二カ月以上、二〜三時間の通

勤を余儀なくされた。

●業務部長の西川と査定部長の首藤はともに西宮市の甲子園球場の東南1kmに住居。震度7の激震地域からはやや南にずれているので直撃からは免れたが震度は6。ともに、ドンと下から突き上げるような激しい衝撃。続いて左右上下の揺れ。食器棚・テレビ・電子レンジなどが転倒、食器は粉々に破損。西川宅のマンションでは沈下が見られたが傾きはない。首藤の団地前ではガス臭が発生、公民館に一時避難。ガス・水道・電気不通のため、大阪市内に一時避難。その後、断水が六週間続く。食事の買い出し・洗濯・風呂などは大阪市内にて行こうという不便

さに耐えた。

●宝塚市の畑田主任宅は3階建ての新築。基礎部分にヒビが入りヒヤッ!とさせられたが基本構造は無事でほっと。神戸市灘区の配偶者父母宅は全壊。しばらく同居となり復興の悩みが今に続く。

この他、電話の不通により2職員・査定員の家族の安否が確認できなかったが、数日後それぞれ無事と判明した。

《その2》当日の支部は?

●十七日は、前々から岩手県支部(県・高の本部・支部)の役員の訪問が予定されていた。

常任幹事の若見は、高槻の自宅で震度5(三〇〇ガル)の強震に見舞われ肝を冷やしていたが、出勤しようにもJR・阪急とも不通。電話回線もパンクらしく不通になりお手上げ状態。六時過ぎに電気が回復したので、テレビでニュースを見る。七時過ぎには、あの阪神高速道路の倒壊現場が中継され、今回の地震がただならぬことを実感した。

●大阪市都島区に住む米津主任

は、マンションの窓から電線が紐をしぼくように、バシバシと音を立てているのを聞く。はじめ、電車に乗るべく駅に向かうが電車は来ず。引き返して自転車にて支部事務局に向かう。檜物主任は、地下鉄が不通のため自家用車で、通常の倍の一時間かかった。

この頃、河内長野市に住む白沢職員は、幸いにも被害のなかった近鉄電車にて天王寺まで来たが地下鉄は不通。天王寺から事務局まで2・6kmを徒歩にて出局。また、外務職員の吉田も途中電話しながら(この頃はまだ市内電話は通話可能)事務局に向かうとの報。大阪市在住の佐々木は車で、谷口は客で溢れかえる天満から徒歩で1時間かかり出勤した。

●米津主任は、若見常幹へ電話にて連絡をつけようとするがつながらず、携帯電話利用を思いだし九時前にやつとつながる。支部事務局の状態と職員・査定員の安否の報告を受ける。大阪駅前のホテルに宿泊する岩手県支部の来訪は予定どおりとのことであり、かねて用意していた資料の説明等の指示を行う。対応は何とか檜物・米津で行い、一行は昼食(会館の会

食は中止)も簡単に済まし次の訪問地・京都にバスにて移動した。

●常任幹事・若見は、自動車で事務局まで行くことを決め、2時間かかってやつと支部に到着。安否が確認できない職員・査定員に電話するがほとんどつながらず。最終的に確認できたのは、翌日の深夜であった。

さらに、地震のあった翌十八日は支部の職員採用テスト(四〇人)の予定日であり、延期の電話を手分けして行いが、これも通話できたのは十件足らずであった。

翌日、地下鉄は開通したので数名が予定通り会場の教育会館に来たが、係が丁重に延期を伝えた。他の受験者には、速達にて延期の旨を伝えたが、神戸在住の学生も十名近くおり被害が心配された。

結局、一カ月遅れの二月十七日に採用テスト(二〇名)を行った。知り得るかぎりでは、地震による間接的な辞退はあったものの直接の被災はなかったようであった。

《その3》現地連絡事務局

●大阪教組は、地震の翌十八日

に田淵直委員長を本部長とする対策本部を設置。大阪支部も同時に大阪教組と連携して情報収集に当たると共に本部との連絡を行った。

●日教済本部は、二十日(金)に「一九九五年兵庫県南部地震災害対策本部」を設置(本部長：横山英一理事長、副本部長：奥村哲雄常務理事)し、現地連絡事務局を大阪支部と兵庫県支部に設置した。

緊急対策として、特別取扱の実施として次の項目が決定された。

- 日教済発二二一号(1/20付け)
- ・ 共済金の支払
- ・ 総合共済……死亡・住宅災害・災害見舞金・一般見舞金
- ・ 火災共済……住宅災害など
- ・ その他共済
- ・ 掛金払い込みの猶予
- ・ 期間延長
- ・ 給付申請手続き
- ・ 罹災証明の支部長名も可
- ・ 査定体制
- ・ 隣接近県の応援

●二十一日(土)には、大阪教組内に、兵庫県南部地震(当時)

日教組現地対策本部が設置され、日教組から役員、日教済本部から奥村哲雄常務理事、大阪教組から田淵委員長など、日教済大阪支部から若見常任幹事が出席し緊急な取り組みの協議がなされた。

さらに、翌二十二日（日）、大阪教組は各府県教組からの支援品を含めて緊急援助物資をトラックにて兵庫県教組に搬入した。

当日の夜六時、緊急の大阪教組単組代表者会議が開催され、日教済からは緊急対策方針（日教済221号）を説明した。

翌週の二十三日（月）夜には、特に被害の大きかった豊中市教組の分会代表者会議が開催され、日教済大阪支部から若見常任幹事と米津主任が参加し、日教済組合員の被害に対する給付内容（特例も含め）を説明した。

●さらに、大阪支部は支部の機能補強・応援と兵庫県支部への支援をはかるため、大阪支部への職員を派遣を本部に要請した。

二十四日（火）、本部から渡辺首都圏センター室長の応援を得て情報の収集と対策を協議した。この間、大阪教組各単組や被災された組合員からの電話の問い合わせ

が殺到し、支部の電話回線は限度一杯の状態が続いた。特に、兵庫県支部には、回線が厳しく制限されているため、問い合わせができず大阪支部に電話相談する回数が増加してきた。

渡辺室長とも協議し、二十九日（日）付け新聞で、別紙のように「掛金の払い込み猶予」などを掲載したお見舞い広告を掲載した。

被災現場では情報が極度に不足し、新聞・テレビというマスメディアの利用は極めて有効であり、この広報も多くは組合員の皆さんを励ますことができた。

●自動車共済での事故は、被災地域でも多発し兵庫県支部の体制が回復したことから、本部文書にもあるように被災地の東地域では大阪支部査定部が緊急対応した。

〈その4〉兵庫県支部へ

●地震発生から十一日目の二十八日（土）、兵庫県支部への見舞いと被災地の調査をかねて、若見常任幹事、西川・首藤部長、松物・米津主任の五名が、リュックサックに一杯の生活必需品をもって見

舞いました。

当時は、阪神高速は不通、国道43号線・2号線も大渋滞。中国自動車道も通行制限。行きは、大阪駅から福知山線で三田迄。ここで神戸電鉄に乗換え谷上駅。さらに北神急行電鉄で新神戸まで（先は不通）。

新神戸駅界隈は、リュックサック姿以外は何もなかったかのようであるが、南側に歩き始めるとビルに亀裂が……さらに、加納町に入ると、ビルというビルはどれも真っ直ぐなのか目をうたがうほどの惨状を呈している。すでに倒れているビルもあるがまだ多くは、手付かずのままであり、十階以上のビルで5階当たりが押し潰されているのが新聞報道のとおりであった。

兵庫教育会館は、外壁のタイルが剥がれているが、建物の基礎は大丈夫のようであった。

県支部では、田治米兵庫県教組書記長・久野常任幹事・松崎職員に支援品と見舞金五〇万円を手渡し激励を行った。

●会館から三宮駅まで下がると、神戸を代表するビルがまったく全部といていい程どこかが傷付い

ている。神戸新聞社屋を横目に見て国道2号線を通りながら、南を走る阪神電車線と北を走るJR線の間の街を東に歩く。

避難所となっている小野柄小学校・ガス漏れの危険が大きかった大阪ガスのタンク群、かなりひどくやられた東灘区の街々……さらに橋脚の損傷がひどい六甲駅付近。阪神電鉄の石屋川車庫では、傾いたままの電車がそのままの状態である。阪神電車道に沿って当時の電車の最西端の駅となっていた阪神電鉄青木（おおき）駅まで歩く。駅前には空襲でも受けたように一面焼け原であった。三宮から青木まで一〇km程に五時間かかった。

〈その5〉給付に全力を！

●地震発生からはほぼ2ヶ月、3月中旬まで地震対策に奔走した。職員は、次々とかかってくる電話に追われる。査定員は、兵庫県支部の支援に通常の一・五倍のエネルギーを使った。

職員・査定員はそれぞれ傷付いた家族のいたわりと自らの生活・通勤の不便にも耐えて、最善の努

力を重ねた。

特に、職員がハンディーを負う中、外務職員（日教済レディー）の吉田孝子と大西益子は、連日出勤し見事に職務をカバーした。地震の発生から5月近くまで説明会は地震の特例を除きまったく開催することができなかったが、的確な電話の対応は組合員の大きな信頼を勝ち取ることができた。生協としての日教済の責務が完うできた思いである。

震災当日は春は来るのか？とすら思われた日々であったが、3月末にはかねて計画していた近畿圏センターの設立にもこぎつけ、また日教済の歴史に新しい第1歩を記すこととなった。

●94年度の支部の給付件数は

- 総合「災害見舞」…七二七件・住宅災害…三三八件・火災…一八件
- 火災「全壊…二四件・半壊…一〇件・部分壊…七四件など」

総合教済の給付総額は、約二億円と通年の倍増。火災は七七九二

万円と給付も2倍近くになっている。

まだ、給付申請のない組合員も多い。引き続き漏れのないように広報活動を強化していくことが重要である。

二月十日付で「日教済支部ニュース号外」を発刊した。ここには府教育関係のみの数字として、

〈教職員〉

- 死亡 3名
- 負傷 46名（重傷2名）
- 全壊 50件
- 半壊 64件
- 部分壊 364件
- 〈児童・生徒〉
- 負傷 332名
- 住宅被災 894名
- 府内への転入 5576名（2/10現在）

が掲載されている。このほか、給付に対する各種の手続きや火災共済の共済案内を掲載した。（B4版カラー4ページ 5万部）

●地震後に開催された二月九日の制度検討委員会、さらに十六日の臨時総代会においても、若見常任幹事から地震への対応状況の報

告と支援への感謝が表明された。

さらに危機管理に係わる本部の対応（電算センター機能）についても意見具申を行った。この結果本部は本部電算機器の耐震化工事とデスクのバックアップ体制の強化をはかることとした。この9月から、大阪支部にて本部のデスクの管理も行うこととなった。関東大地震が予測される中、阪神大震災の教訓を忘れてはなるまい。

●分会訪問でも、地震のため、火災共済への関心が極めて高くなっている。引き続き共済内容の改善に努力し、組合員のための生協・日教済の発展に全力を尽くす覚悟を固める今日である。

最後になったが、一月末から一週間ごとに大阪支部のために派遣された本部の「渡辺省三首都圏センター室長・畑山満明福祉共済会部長・高橋浩一業務推進部職員・吉川朗首都圏センター職員・外山順一課長・木村樹美雄主査・井上幸正主査・下山幸浩経理課職員」さらに、2月に来局激励された横山英一理事長ならびに副本部長として尽力された奥村哲雄常務理事・事務局局長の前田節生常務理事・三浦憲子給付部長など多くの方々

に心から感謝の意を表します。



その時、私は…

子どもたち、教職員の被災体験

ぼくたちの町が、
須磨の町が
なくなってしまった…

西宮市立平木中学校へボランティアとして行った八尾市立東山本小分会の中迫先生が、平木中の先生から生徒の作文を預かって来てくれました。その一部を掲載させていただきます。

悪い夢でも見てんのかと思って、 何が分からへんかった。

一月一七日午前五時四六分、前の夜から、熱があつてコタツで寝ていた私の上にお姉ちゃんが乗ってきた。

悪い夢でも見てんのかと思って、何が分からへんかった。

やっと正気に戻つてお姉ちゃんを見たら、お姉ちゃんはタンスにはさまれていた。

「お姉ちゃん助けたつて。」

泣く気力もなくて奮えながら叫んだら、自分も二つの大きいタンスにはさまれていた。パパが逃げ出してお姉ちゃんを助けに来た。

そのあとすぐ、ママが裸足でガラスバリバリの階段を上がつてきた。

足が切れているのも感じないで、私らを心配してくれて。

海中電灯つけて階段見た時ゾッ

とした。

ママが一番前でタオルでガラス落として行きながら、四人で外に出た。

その時は、まさか家にひび入っているとか、中の壁がボロボロで家具も全部倒れて、家も傾いているなんて思わなかったし、阪神大震災つて名前がついてまうぐらいのものとは夢にも思わへんかった。その日は、広田小学校も、平木中学校も人がいっぱいいて、行くところなかったから、西宮警察行つた。入口の所のろう下でめっちゃ寒かった。

となりになっていた人うるさいなあって思つとつたけど、「寒いから、これひき。」ってマット貸してくれた時は泣きそうになった。

今まで、水も電気もガスも、家

族もあつて当たり前つて思つてたけど、こうゆう事になって大事さが分かった。

ごつついこわかつたけどいい勉強になったと思う。

◇ ◇ ◇ ◇

今回の地震で、私の中で心に残つてるのは、やはり〇〇さんのことです。地震があつてまだ暗い時は、自分達や、まだ外に出てこないマンションの人達の事で頭の中はいっぱいでした。でも明るくなるにつれて、近所にすんでいた〇〇さんは大丈夫なのかと心配になり、母と二人で見に行くと、おばさんがふとんにくるまって〇〇さん達の名前を呼んでいて、近所の男の人達が救助作業をしていました。母に救急車を呼んでいと言

われ、電話ボックスへ行つても一九番は電話がさつとうしてつながらず、あきらめてもどつた時はもう〇〇さんは病院に運ばれたと言われました。その後、お姉さんやおじさんが助けられたそうです。でも、その日〇〇さんがなくなつたと聞いたとき、はつきり言つて信じられませんでした。

幼稚園の時から一〇年間ずっと同じ学校で、当たり前の存在だったので、ひつぎの中の〇〇さんを見ても、起き上がってくるんじゃないかなという気持ちになりました。

ある日、〇〇さんのおばさんに、「〇〇の分も頑張つて勉強して楽しい高校生活おくらせてちょうだいよ。」と言われました。この言葉を聞いて、私だけでなくみんなが〇〇さんの分も頑張らないといけないと思います。

この地震でいろんな事を知りました。このことを忘れずに頑張つていきたいです。

近所の子が死んだ。

弟や妹の同級生も死んだ。

ぼくたちの町が、須磨の町がなくなってしまった。

なみだが出そうなくらい、悲しかった。



平成七年一月一日、ぼくは一才のたん生日を家族で祝ってもらった。そのとき、ぼくは、まさか、こんなことが起こるとは、夢にも思わなかった。

ドーン、ドーン。ものすごい音がした次のしゅん間、ぼくは目が覚めた。まるで火山が爆発したような激しいゆれの中で、家が震える、ものが落ちる、ガラスが割れる。となりで母のさけび声がある。これでもか、これでもかと、ゆれが続いた。ぼくの頭の上にも、本がいつぱい落ちてきた。妹の上にも人形ケースが落ちてきたようだった。痛かった。こわかった。それでもぼくは、これは夢じゃないかと、半分そんな気がした。

しかし、その後でぼくたちは、まだましな方であることが分かった。道路はひび割れ、へいは倒れ。傾いた家、ぺしゃんこになった家。近所の子が死んだ。弟や妹の同級生も死んだ。ぼくたちの町が、須磨の町がなくなってしまった。なみだが出そうなくらい、悲しかった。

それから、ぼくたちの家には、電気も水道もガスもなくなった。ぼくたちは、朝から水運びを手伝

った。救援物資を配る手伝いをした。四時半を過ぎると、家は真っ暗になり、寒さにふるえながら、服を着たまま、ふとんに入った。それでも、ぼくたちは幸せだった。家族はそろっているし、ねる家もあるし――。

地震の後、母が何度も、こう言った。

「神戸の子は、こんなひどい目に会ったんやから、絶対に、ただで起き上がったらあかん。日本中の人に助けてもらっとんやから、強くならんあかん。やさしくならなあかん。神戸を元通りにせなあかん。」

ぼくは今、父の友人のおかげで、八尾市の小学校に通えるようになって、とてもうれしい。みんな親切にしてくれる。この感謝の気持ちをもち続けて、いつか、ぼくも人の役に立つことをしたいと思う。

高美南小学校 五年生

黒田 泰史

豊川南小1の4

「大じしん」

ぼくは、大じしんがおこったとき、ねて、

「うるさいな。」

といいました。おきてみると、おとうさんがおきていたので、

「なに、してん。」

といいました。そしたら、ぼくたちかねていへやにたんすがあつたので、それをおさえていました。

ぼくは、立つてうごいて、だいいどころを見ました。そしたら、ガラスびんがわれていました。それから、ぼくのベルデイのびんがわれていました。いらつきました。

「じしん」

よるにじしんがありました。わたしは、びっくりして目をあけると、おとうさんがわたしのの上のについていました。わたしは、ちょっとおもたいとおもったけれど、びつくりした。それでおかあさんが、おとうさんに

「なに！」

つていいました。おとうさんが、

「じしんや。」

つていいました。おかあさんが、

いいました。

そしたら、パリンといいました。あまりに大きいじしんなので、わたしは、もうしんじやうわ、とおもいました。

すこしすると、とまりました。すぐにおきて、へやを見ました。でも、別におさらもわれてませんでした。わたしは、ずっとふとんの中にいました。

それから、すぐ、テレビをつけてニュースを見ました。でも、ともだちがみんな大じようぶだったので、よかったです。

「じしんのこと」

ぼくは、ニュースを見ました。じしんのことを見ました。こうべで大きなじしんがあるんだって、いまからやるんだ。よく見てたら、じしんがありました。すごい、いえがいっぱいこわれてたから、すぐこわれていました。すごかったとおもいました。

大阪市佃西小

とても怖かった地震

奥野 みほ

一月一七日の朝、五時四十六分ごろ、大きな地震が起きた。

最初に、ドンと下に下りて、次に、左右に揺れた。

ドンと下に降りた時に、父が、「ふとんをかぶれ。」

と言った。

でも、わたしは、あせっていたので、父の声が聞こえなかった。そして、左右に揺れている時に、フランス人形が落ちてこようとすると、母が、

「みほ、危ない。」

と言った。

その時、母の頭の上に、ケースが落ちてきた。

とても、痛そうだった。

血が少し出ていた。

地震の揺れがやっと止まったが、母の血の出はますますひどくなつた。わたしは、母に、

「お母さん、そんなに血出てるから、病院に行ったら。」

と聞いたら、母が、

「今、行っても混んでいるから、九時ぐらいに行くわ。」

と言った。

その時、電話がなった。わたしが電話に出た。それは、友達のおばさんからだった。

「お母さんに替わるね。」

と言った。

そのおばさんの家は一階であまり被害はなかった。だって、リンゴ一個落ちただけだから。そのおばさんが、

「手伝いに行こか。」

と聞いた。母は、もちろん

「手伝いに来て。」

と言った。

なぜかと言うと、弟の机と父の机が倒れていて、瀬戸物が三分の一ほど割れているし、弟のタンスが倒れているし、そして、父のお酒もこぼれているし……。

わが家はともいそがしかった。やっと片付いたと思ったら、もう夜だった。

母は、夕飯の支度をしているところだった。

わたしは母に、

「今日の一日長かったね。」

と聞いたら、母は、

「そうね。」

と言った。それから手伝いをした。夕飯は、みんな喜んで食べた。

夕飯が終わると、

「もう大丈夫だから。」

と言って、風呂に入った。

ふとんに入った時、わたしは、

こう思った。

(もう、こんなに怖い地震はきて

あまりに大きい地震なので、わたしは、もう しんじょうわ、とおもいました。

ほしくない。こんなに人々を困らせるようなことは、許せない。」

そして、母に、

「お母さん、頭、大丈夫？」

と聞いたら、

「だいぶましになったから大丈夫。」

と言った。

わたしは、母に、

「おやすみ。」

と言った。

じしん

斉藤 優美

一月一七日の（火）午前五時四六分、しんど七の大じしんが起りました。わたしはじしんでゆれた時、すぐとびおきてふとんの上にすわっていました。一〇秒くらいして、お父さんとお母さんが、わたしが一人でねている部屋にきました。どうして一〇秒もかかったかとうと、お父さんがお母さんをかばっていたから、お母さんがこようとしてもこれなかったのです。

じしんがとまって、ていでんになったから、すぐお父さんが下におりて、お母さんがかいちゅうでんとうがどこにあるか教えて、かいちゅうでんとうをつけてガスを

全部切って、コンセントもぬきました。それであぶない物をゆかにおきました。そしてお母さんがラジオをとりに行つてわたしのふとんの中でわたしがかいちゅうでんとうをつけてラジオを聞いていました。

よしんがおこるたびにわたしはふるえていました。それからちよつと時間がたつと、電話ばかりかかってきたり、電話をしていました。いばというおぼちゃんの家のかたむいたから、わたしたちの家にひなんしてきました。今もまだ家にいます。ときどきおぼちゃんの声が大きいかからその声でびっくりする時もあります。

じしんがおこった週の木曜日くらの夜の夜に家をでて、おぼあちゃんの家にはわたしだけとまりました。次の週の日曜日にお母さんとお父さんが車でむかえにきておぼあちゃんの家にとまりました。

そして、月曜日の一時ごろ、りさこの家にむかつて行きました。それでりさが帰って来るのを待っていました。帰ってきました。その夜お父さんたちが帰りました。北おか小学校には、始めいくのがいやだったけど二日くらい行くと

なれました。苦楽園小学校のみんなと先生にも早く会いたいと思っています。

魚崎小学校を訪れて

吉田 暁子

私は魚崎小学校へ行くことが決まった時、どのような様子になっているのか全然知らずもうだいたいかたづいていてときいたので、もう全然大丈夫なんだろうなあと、思つてボランティア活動をしに行きました。神戸へ行く電車の中で、だんだんとあたりの景色が変わつていくのに気が付きました。うまく言えませんがすごくびっくりしました。まだかたづけしていない家がたくさんあり、一階がくずれて、ななめになつている家や、完全につぶれてしまつている家、改めて地震の恐ろしさを知りました。小学校につくと、学校の中で暮らしている人がいました。私は紙コップにメッセージを書き、ぜんざいを配りました。大変な事があつた後なのに現地の人はやさしく、笑顔で受け取ってくれました。まだまだ時間がかかると思うけど、みんなで助け合つて、一日も早くもとに戻ればよいと思いました。

死ぬのは一瞬のことだなと脳裏を よぎった。悪夢のようだった。

市教組
加島小分会
林 信幸

今ふと思う時がある。あの日がなければ……。あの事がなければ……。みんなはもつと納得して生きていたのではないだろうか。もう二度と戻っては来ない生活、自分の家、あの景色、近所の方々、そして六〇〇〇人近い人々……。更地となったわが家の庭があった所に、一本の花が生えていた。いつも可憐な花を咲かせてくれていた。たしかに私の家があったんだ。ここで暮らしていたんだ。薄暮、少し酔いがまわっていたせいか、あの日が悪夢のような錯覚を起こしてしまった。

近くに山あり、川あり、海ありで買い物便利で、交通至便の街に庭付きの木造一戸建ての家を借りた。縁側から春の花が見えるように庭作りをした。阪急電車の車庫のすぐ北にあり、遠慮がちに走ります始発の電車に起こされ、最終の電車で一日の仕事の終わりを感

じて床に就く毎日だった。

いつもと変わらない夜が明けようとしていたころ、突然揺れ出し、飛び起きて振りとはさまれまいと、とつさに家の柱につかまった。ガシャガシャ、バリバリと家が壊れていき、死ぬのは一瞬のことだなと脳裏をよぎった。悪夢のようだった。アクション映画の爆発シーンのようだった。揺れがおさまリドアが開かないので、上を見たら天井と柱の裂け目から暗い夜空が見えていた。大きく傾いた家から家族四人全員が怪我一つなく脱出し、近所の人たちと中学校の校庭に避難をした。日が高く昇る頃、断片的に被害を知らせるラジオ放送と遠く見える火事の煙とサイレンと上空を飛ぶ取材のヘリコプターとが、茫然と座り込んだ人々に現実であることを教えていた。二度と会えなくなった人、出会った人……

近所の女の子、世話になった不動産の一家、卒業を前にした六年生の女の子……。一瞬にして亡くなった人々は、残った私達にしっかりと生き抜いてほしいと訴えている。

一方、多くの人々のやさしさを引き出し、居ても立ってもいられない人々がかけつけて来てくれた。自分の持てる力と知恵とアイデアと技を発揮し、多彩なボランティア活動は被災者を大いに力づけることとなった。特に、震災当日から自分の家や家族のことをおいて、駆けつけてきた学校の教師の活躍ぶりを目の当たりにし、私も仲間に入れてもらった。その後大阪教組がボランティア派遣を決め、私の分会からも多くの人々が参加をしていた。私は、この間自分の家族のことで精一杯で何もできなかったが、今後、住民としてできることを考えていきたい。

行政は、住民の声を聞かずに、区画整理として防災都市を目指し高層ビルや広い道路を計画している。先日、住民は新しい街づくりを願う祭りをを行い、そこに「在日」の人々や「障害」者が元気に参加をしていた。今や、この地に新しい自治会が誕生し、障害者や子どもや老人が住みやすい街作りを目指し、結集を呼びかけている。「この街には、いろんなスペシャリストがいるんです。厳しい状況ですが、力合わせていけば立派な街ができます。震災が無ければこうして出会わなかったと思います。これも、何かの縁ですね。」と若い役員さんが語っておられた。本当の意味で人権が大切にされる街作りに、夢を託しながら自分ができることはないかと考えている日々である。

私は声も出ず、頭から布団をかぶってひたすらじっとしていました。

豊中市教組
南桜塚小分会
福島正恵

あの震災の日、最初のドーンという大きな突き上げるような揺れがあった時、私は二階で寝ていました。（自宅は神戸市灘区、JR六甲駅の北側にありました。）そのあとすぐ、家全体が横に揺れ出し、私は声も出ず、頭から布団をかぶってひたすらじっとしていました。部屋の中の倒れたものは、幸い頭の上には落ちては来ませんでした。夫は娘の部屋へすぐとんで行きました。すでに間の部屋のたんすやドレッサー等は積み重なって倒れていました。娘は、ベッドの脇の壁一面の本棚の本の下に埋もれていました。最初、名前を呼んでも返事が聞こえなかったのですが、一瞬だめかと思いましたが、あわてて夫が本を掘り起こしてみると、無事でいたので安心しました。とっさに布団をかぶったのがよかったみたいで、これが夏だったら圧死していたと思うと、未だにゾッとします。ホッとする間も

なくベランダから隣の実家をのぞくと、母が何やらモゾモゾと着替えをしようとしています。「火傷をした。お湯をかぶった。」と、ブツブツ言っているのですが、その時はそれほど大きな火傷とはわからず、「何してるの、早よ逃げよ。」と、引きずるようにして下へおろしました。本やガラスだらけの階段を降りようとして、家が北側へ大きく傾いてしまっていることに気がつきました。外へ出てみるとお向いの家は屋根だけを残して倒壊し、お隣もそうなりかかったのが、電信柱にもたれてからうじて止まっています。近所のビル以外の家は殆んどそういう状態でした。まもなく、百メートル程西に住んでいた妹一家が、裸足のまままで逃げてきました。一階が崩れ落ち、二階のベランダから脱出したと思う間もなく火事がせまってきたので、風上のこちらへ逃げてきたとのこと。火が出たと聞いて、

「もうだめだ。」と私達もその時は覚悟しました。実家は豆腐やをしていて、油も多量に保管しています。火事になれば爆発間違いないでした。その後はしばらく商店街の人達と消火活動に走り回りました。水道管が寸断されたのか、水は全く出なくなり、消防車が来てくれても、殆んどなすすべもなく、どこかの家の風呂の残り湯や、家の作りかけの豆腐等、とにかく水気のあるものはバケツリレーでかけまくりました。気休めに過ぎなかったかもしれませんが、風向きとアーケードのおかげで、二軒先で火はとまりあえず止まりましたが、妹の家も含めて西側数百メートル四方は焼け野原となりました。知り合いもたくさんの方が亡くなりました。地震の恐ろしさももちろんですが、何時間にもわたって続いた火事の恐怖の方が大きかったように思います。最初に母をつれていった近所の外科医院

は、まるで野戦病院のようにごつた返っていて、母は頭から熱湯をかぶって、肩から背中にかけてひどい火傷を負っているのに、簡単な消毒をされただけで帰されてしまいました。もつとひどい状態の方もおられたので仕方なかったのかもしれません。とりあえず、近くの六甲小学校へ避難しましたが、ここも二千数百人の人であふれかえっていました。途方にくれていたところへ、夫の実家の方から六甲山越えてきてくれたので、母と子どもを託しました。母は北区の総合病院に無事入院でき、父と私は避難所で数日お世話になった後、豊中へ何とか移動しました。職場や組合の仲間の皆さんに、本当にお世話になり、今日まで元気にやってこれたと、心から感謝しています。

するど、ドーンと住んでいるマンションが動き、ガタガタッと家中が揺れると同時に…

大阪市教組
大和田小分会
小西健一

地震から10日が過ぎました。

17日、朝5時半頃、目を覚まして、もう少しウトウトして6時になったらふとんから出ようと、目覚まし時計を合わせなおして、ふとんをかぶりました。

すると、ドーンと住んでいるマンションが動き、ガタガタッと家中が揺れると同時に、タンスは倒れる、頭の上ではメリメリバリバリとものすごい音で揺さぶられています。思わず倒れてくるタンスを体で支え、妻の体をかげにしました。

地震がおさまったので、まわりを見ましたが、夜明け前で真っ暗。何も見えない闇と、また地震が来るかも知れないと思い、子ども二人の無事を確かめ、はだしだったので靴をはかせ、あわてて外へ飛び出しました。

しばらく地震がおさまっていたので、恐る恐る部屋に上着をとりに入り、すぐに飛び出るの繰り返し。

し。冬の夜明け前の寒さは、全然感じませんでした。私の住むマンションの住民たちも全てが表に出ています。ほどなく救急車が、消防車がサイレンをならしっぱなしで走って行きます。国道2号線に出ると、あちらこちらで火の手が上がっていました。煙だけでなく、炎も見えます。

手にした携帯ラジオは、ただ、「神戸で大きな地震があったようです」と繰り返し返すのみ。

一番欲しい情報は、全く入ってきません。

そのうち、空がだんだんと明けていきます。まわりがうっすらと見えてきます。かわら屋根の民家が真ん中から折れています。建て増しをした家でしょうか。2階がそのままなめに傾いて道路へはみ出しています。マンションのまわりを見ただけで、これだけのひどさです。道路に亀裂が入って

ます。目の前の信号機は、消えたままです。毎日見ていた街並が大きく変わっているのです。

寒さがびんびんと体に忍び込んできました。部屋に戻ると電気がつかないため恐る恐るいつでも逃げだせるようドアを開けたまま、靴をはいたまま部屋に入ると、食器棚の食器は部屋中散乱し、冷蔵庫のドアも引き出しも開いたまま、炊飯器はひっくり返り、ポットも横倒し、テレビはアンテナ線を切ってひっくり返り、ドレッサーは支えている支柱が折れている。

よくまあ頭の上に落ちてこなかったものだ。玄関の下駄箱が廊下の真ん中まで動き、上のものは落ちてこなごな。しかし1000円で買ったシクラメンは下駄箱と一緒に動いたのか、落ちずに花を伸ばしている。

娘の部屋をのぞくと、本箱が倒れ、何百冊とある本はバラバラ。みんな娘の頭の上にふってきたよ

うです。娘は、「たすけてー。」と言っても、誰も来てくれないので、自分で本の中から逃げ出したとのこと。親子四人何より無事でよかった、よかった。

携帯ラジオのニュースは、震度6の地震があったということだけ。被害の様子はまだ不明。

ベランダに出ると、裏の民家はボロボロ。隣の土蔵は壁がドスンと落ち、中身が丸見え。駐車場のアスファルトは亀裂が入り、向かいのマンションは各階ごとにひびが入っている。このマンションと同時に時期にできたマンションは他は一階がつぶれたという。

他の方を見ると、マンションが斜めになっている。南の方を見ると、阪神高速道路が少し傾いて見える。

やがて、電気がついたので、ポットに水を入れ（水は出たので安心したが実はマンションのタンク

保育所から中学まで一緒だったPさんが死んだ。Y君が死んだ、S君は家族が死んでひとりぼっちになっちゃった。

の水でこの後、すぐ使用不能になる) わかす。ごはんも昨日炊いたものを食べ、部屋のかたづけ。食器を手で拾い、掃除機で吸い取る。ふと頭上を見ると、電気のガラスシェードがこなごなにくだけてない。裸電球がポツンとついているわびしい状況。

学校へ、親戚へ電話を入れるが不通。ただいま混雑していますので、ご迷惑をおかけしますが、もう暫くしてからかけなおして下さい。その後、それでもかからない。何とかガラスの破片を整理したが、ダンボール、紙袋等々へ入れてもなお入りきらない。

娘の友人が来て、だれだれさんとか、ベッシャンコに なった 私もたまたま床に寝てたので良かった。近所の人「Kさんと亡くなられた」という情報が続々と入る。妻(芦屋市精道小勤務)の学校の校下の様子がわからないので、一度学校へ行くという。一人では不安なため、娘と二人で行かせる。

家に戻ってから様子を聞くと、学校は、遺体置き場になっており、体育館だけでは、収容しきれないため、図書室へも入れている。校

下津知町は、壊滅的で電柱は倒れ、ベッシャンコの家ばかり。かろうじて六軒ほど建っていたとのこと。

Yさん一家は、お母さん、六年の娘、四年の娘が遺体で掘りおこされる。子どもは眠ったまま死んだみたい。だけど、青く。(圧死) なっていたとのこと。後で助け出されたお父さんも病院で亡くなる。家の中で片付けをしていますが、時たまグラツとくる。そのため、食卓を食器棚にくっつけ、いつもその下に逃げられるよう、親子四人が入れるよう、毛布を敷き、ナップサックはいつでも逃げ出せる用意をしておく。

TVを修理し、ずつつけっぱなしにするが、芦屋市の情報が殆ど入らず、隣の神戸市東灘区や長田区、西宮のニースで今回の惨状をつぶさに見る。

子どもたちは、自分の友だちの安否を尋ねて、各学校の避難所回りを始める。誰々君はいた、あそこのおばちゃんに頭をにげがした。誰々さん わからへん。まだ埋もれてるんちゃうか。保育所から中学校まで一緒だったPさんが死んだ。Y君が死んだ。S君は家族が

死んで一人ぼっちになっちゃった。誰々ちゃんは、県立芦屋高校に、誰々君は、宮川小に、あの先生とも宮川小にいてるで：という情報が入ってくる。

余震は続く。

NHKをつけているけど、今の余震が震度いくらとテロップがなかなかでない。民放をかけると○時○分余震があった。神戸震度3。これを知ると今の余震はこんなものかと安心する。

初めて、TELがなる。友人からのTEL。嬉しくて 嬉しくて：。こちらからは、まだ誰もかからない。一家全員無事。惨状について話すとともに、問い合わせがあれば元気だと伝えてほしい旨をいう。いるものはと心配してくれが、やっぱり水しかない。風呂の残り湯はトイレに使い、食器は使い捨ての弁当箱。しかし、食欲がわかない。トイレも出ない。そのうち、風邪をひいたのか体中がほてり、熱が出てくる。今ここで寝込めない。気をとりなおし、片付けを続行し、掃除機をかける。のどがかわく。水はガブガブ飲めない。

倒れる物のないリビングをみんなの寝床にして、横になりつつ、TVに釘づけ。何かをするという気力が起きない。芦屋の情報はまだ入ってこない。娘の友だち一家は避難所に行くと言ってきたので、家にある果物、野菜ジュースなどを渡す。皆が食べ物が欲しい。わけてあげる。

夜になると、もう家族だけ。不安を抱え、過ごす。余震で食卓の下に逃げる。何度繰り返しただろう。夜はこわい。ペランダから外を見ると、近くのマンションの最上階が燃えている。恐ろしい。道路は消防車、救急車、パトカーとサイレンがなりっぱなし。車が渋滞している。

玄関のドアは、隙間を作って逃げられるようにしておく。

部屋の中のTVはつけっぱなし。ウトウトしては、余震におのき食卓の下へ。何度くり返しただろう。サイレンはまだまだなりやまない。熱が出たせいか、のどがかわいてしかたがない。少しさ湯を飲む。今まで薬を飲むのが嫌いであつたが、薬を飲む。楽になる。熱は下がる。

子どもたちは、買い置き野菜ジュースを飲んでいる。余震の恐ろしさをTVがしゃべっている。現実には、やられるたんに恐ろしいんだ。天井を見上げる。もう一度同じような地震が来たら、きつと天井は落ちるだろう。

まんじりともせず、夜明けが近づく。今朝（18日）の午前5時46分：何も起こらない。早く夜があけて欲しい…。

夜が明ける… ホツとする。たとえ停電になっても、物が見える、逃げ道がわかるから。

妻も同じ気持ちである。子どもたちは、疲れたのか、よく眠っている。TVは長田区の火災がおさまリつつあることを写している。長田区に住むNちゃんとは、大丈夫だったのだろうか。須磨区のEさんとは大丈夫だったのだろうか。

一夜明けただけで、知り合いのことが気にかかる。昨日はそれだけの余裕が持てなかった。まだ、我が家が怖くても居場所として確保できているからだろうか。今、考えるとこの日のことが断片的にしか思い出せない。一家そろって

息をひそめ、余震におののいていた。電話をかけても昨日と同じ。ちつともかからず、テープの返事が返ってくるだけ。

そういえば、昨日は、3人から電話があっただけ。心配してくれている。風呂に水がある。トイレに流すのに使える。そうそう表へ飛び出して夜明けを待っていた時、国道2号線を、連休を利用してスキーに行つてたのだろうか、大きな荷物、スキーをかついだ人たちが西にむかつてゾロゾロ歩いていった。シュプールが西宮あたりで脱線したという。高速道路が落ちた甲子園では、スキーバスが雪をのせて、おやうく落ちかけという場面もあった。

東灘区に住む初めての教え子が家につけてくれた。東灘区は、停電している。家の前の43号線の高速道路がこけた場所には、血があたり一面に流れていてとても怖かった。今、芦屋の友だちの所にいるという。

18日は、電話が時々かかってくるようになる。みんな心配してくれている。園田（尼崎）の友人から電話が入る。とりあえず、芦屋

の惨状と家族の無事を伝える。園田もよく揺れて、食器類は割れて散らかったけど、タンスなどは倒れなかった。何かいるものは？と尋ねられても、水だけ。園田も断水している。連絡があれば無事と伝えてほしい。

夕刻、園田から自転車でも水を運んでくれた。道路は混雑。自転車でも1時間30分もかかったとのこと。でも、ありがたい。気をつけて帰ってほしい。無事に帰ったかどうか電話が通じにくい。ため、大阪の職場へ行って水をくみ、運んでくれたとのこと。その時の感謝は、後になっても感謝、感謝…。

また、夜がやってきた。今日は、十件ほど電話がかかった。両親の家（鈴蘭台）が傾き、天井が落ちかけているとの連絡が入る。気になるけど、気をつけるようにとしか伝えられないもどかしさ。どうにもならない。

内部先生からも電話が入る。職場に無事を伝えてほしい。森本先生からも電話が入る。みんな心配

してくれている。やさしさを実感する。何かいるかと言ってくれるが往復でケガをされると困る。食べ物もしばらくはある。幸いにも電気が通っているので、暖房はできるし、心配はいらない。2人も緑の公衆電話の利用を言つてた。

明日、妻と娘が鈴蘭台へ行くことを決める。年老いた両親を放つてはおけない。歩いて行くしか術はない。何時間かかるかわからないが行く。1人で行動するよりは、2人です…。

同じように、まんじりともせず、恐ろしい夜は続く。余震も続く。二晩目が明ける。朝食をとり、妻と娘は鈴蘭台をめざして出発する。道中無事であつてくれと…。頭上と足もとだけはしっかりと気をつけて。

しばらくすると、2人が帰ってきた。忘れ物かときくと、ローソンの前を通ると、1人水のペットボトル2本とカップラーメン5個の限定販売をしていたので買ってきたという。水が4本、息子と2人、今日、明日は何とかしのげる。今日は、よく電話がかかって来るようになった。しかし、こちら

同じように、まんじりともせず、恐ろしい夜は続く。余震も続く。二晩目が明ける……。

からは、全くかからない。テープの声だけ。

妻と娘は、今ごろどこを歩いているのだろうか。

かかってきた電話には、無事を伝えてくれるように依頼する。隣家の老夫婦がどこそこに水があると伝えてくれる。飲めないけど、食器を洗ったりはできるという。給水車が来たという情報も入る。ようやく芦屋市内の情報が入ってくるようになる。隣の老夫婦は名古屋へ避難するという。西宮北口まで歩いていくという。そういえば、54戸ある私のマンションにも灯が消えて、半数以上が遠くの親類、知人を頼って避難していつている。地震の後、表へ飛び出している。地震の後、表へ飛び出している。地震の後、表へ飛び出している。息子と2人で今日は夜を迎える。昼間交代で眠る。しかし、子どもと交代はできない。それでも少しずつ眠る。夜は眠れない。

20日、少し落ち着いてきたかな？ 妻1人だけ帰ってくる。神戸電鉄で三田へ（1時間）、JR福知山線で宝塚へ（30分）、阪急宝塚線で十三へ（30分）、阪急神戸線で西宮北口へ（20分）、自宅ま

で歩いて1時間かかって戻る。

往きは、有馬街道で親切な人に少しの距離だったが自動車に乗せてもらって登りだったから助かったとのこと。それでも約6時間かかって、両親の家に着いた。家は半壊状態。天井は落ちかけ。全体が斜めに傾いている。そんな中、四人で寝たけど、眠れなかったという。横になると体がころがっていきそう。怖いので芦屋へくるようにいうが、残るといので、娘を残して帰ってきたという。

しかも、天気予報では、明日の夜半から雨が降るといふ。心配で放っておけない。ひどくなると娘が避難所へ連れていくという。

妻は、学校へ出かける。今日は、学校泊まるという。気をつけてがんばってほしい。

清道小学校のYさん一家。父は助け出されて芦屋病院へ。母と中1の娘、小6の娘は亡くなった。大阪の友人から電話がかかってきたとき、連絡先の会社へ電話を入れてもらっていた。その後から会社から電話があったが、Yさんも病院でなくなったとの連絡が入る。会社の人は行けないと思うが明日通夜で、日曜日に河内天美で葬式

をするとのこと。残念でならない。もうすぐ卒業式なのに……。

精小では、校長の家も教頭の家も全壊状態。それでも、学校も避難所になっているため、ずっと泊まり込んでいる。

私と息子は給水車の来ている阪神打出の駅へ水くみに行く。友人が自転車を持ってきてくれた水タンクとペットボトルとバケツとをもって。買物カートがあったので、少し助かったが、水は重い。水のくみ出しも途中も倒壊家屋、恐る恐る歩く。歩くのが恐ろしい。それでも水がいる。

その後、2人で芦屋市内を歩き回る。2号線は人の行列。車の列。単車が歩道を走る。西（神戸方面）へ行く人、東へ西宮北口をめざして行く人、さまざまである。知人の家々はどうなっているのか、自分の目で確かめなくては……。JR芦屋駅の西は線路が曲がっているが東側は真っ直ぐにのびている。新しい家も傾き、こわれかかっている。古い家は軒並みにつぶれている。当日、火の出ていたマンションは、立入禁止。ななめにグ

ラツと傾いたマンション。歩くごとに怖さを感じる。怖さが目にしみる。ここで人がなくなつたんだろう。助かりそうもない惨状。



「地震？」その瞬間、 テレビも消え、 真っ暗闇になる。

東大阪市教組
柏田中分会

西野弘子

あれから五カ月、暑さに布団を蹴飛ばし、二階で眠っている三人の子供達。もし、今あの大地震が起きたら、と思うとゾツとする。二段重ねのたんすが、彼らにのしかかり、頭を飛び越えて衣装缶が落ちていた。あと一〇センチ手前だったら、冬でもだめだったろう。午前五時四六分、突然の揺れ。私達夫婦はすでに起きていた。「地震？」その瞬間、テレビも消え、真っ暗闇になる。すごい物音と激しい揺れに、思わず「キャー」と叫び、夫が上からかばってくれた。

揺れが収まってからしか、子供の元へ行けなかった。壁土の匂い。家中の物が散乱しているらしく、足の踏み場もない。玄関の鍵が開かない。冷蔵庫が前に出てきて、通れない。やつのことで、裏の戸が開き、ガスの元栓を切った。二階は、あの状態である。夫がたんすを持ち上げ、幸い全員けがもしなかった。外はガス臭いし、サイレンも響く。とにかく布団にくるまり、明るくなるのを待った。近所の人が「すごい被害や。大丈夫ですか。」と声をかけた。懐中電灯を探り当て、ガラスが散乱していることに初めて気づいた。靴下をはいていたからけがをせずにすんだのだ。

家中がひっくり返っている。壁も落ちている。家が傾いていることに気づいたのは、二日後だった。風呂の水で、幸いトイレは流せた。ガスの来ない毎日は、お風呂に困った。近所の家で、太陽電池で沸かしたお湯を節約しながら、使わせてもらった。お店に人が殺到し、カップメンが売り切れていた。幸い、一週間分の食糧を買いこんだ矢先だったので助かった。

今、夫の両親の家が解体されている。ショベルカーが人の生活に土足で入るような寂しさを感じる。多くの人の命が奪われて、胸が痛むが、その中で、私達の場合は、この震災を、次へのステップにせ

犬が瓦の落ちる音や 異様な空気に うなり声をあげて

大阪市教組
高殿小分会

小橋昭美

ねばと思う。二段重ねのたんすは、いまだに、脇へよけている。

何となく、鼠がよく暴れ回る夜でした。目が覚めたらまだ暗かった。ので、もうひといき寝ようとした矢先のことでした。天井が揺れて、おさまるまでは歩けない何秒かが過ぎ、部屋の中のものぐちやぐちやに転がりまくる始末です。特に台所は悲惨で食器棚の中からガラス食器や皿が束ねてずり落ちとび散って割れていました。庭では、犬が瓦の落ちる音や異様な空気にうなり声をあげて語っているようでした。昔の福井地震や、室戸台風、ジェーン台風などの災害時、小さい兄弟で、大黒柱につかまったり、雨戸を押さえながら、外をのぞいて、「よなおれ、よなおれ。」と唱えていた記憶があり

ます。大空襲のびびーんとひびく大きな音とおそろしさが思い出されました。

六時を待って、テレビに首ったけになりチャンネルをパチパチやり乍ら同じニュース場面が何度も何度もくり返し放送されているのを見ていました。

庭に出てみると二階の大屋根の棟瓦がなくなり瓦の下が土がごろごろ、白くはがれ、下屋根に落ちて割れて散乱する状態でした。近隣の家のどこよりも被害が目立ち、情けなくなりました。とり敢えず、雨の対策に手配をしましたが、なかなか通じない電話、走り回る業者の連絡にいらいらしながら夕暮れを待ちました。ポツポツ降ってくる雨にテントを広げ終わったのは夜になってからでした。テントが風でふっ飛んだり瓦のずれ落ちる心配な日々もありました。こんな時に身軽で高い木登りの好きな、単身赴任の夫のいないのがくやまれてなりませんでした。

安否を尋ねる電話は何度もありましたが、心配しても電話できず、神戸の姉家族などは国際電話回線と遠距離通話で家屋の全壊と家族の無事を知る有様です。

今回の震災でなくなられた方々のご冥福を祈ると共に皆様からのお見舞など厚く感謝いたします。

おばあさんは、 黙って パンを差し出した

大阪市教組
常盤小分会

柴山浩一

あの日から5日目、1月22日、雨。私は、自転車に積めるだけの荷物を積んで神戸市長田区の自宅から、阪急西宮北口駅へ向かった。当時、大阪へ出るためには、その方法が最も確実だった。

なんとか無事だった妻子と離れ離れにならなくてはならない。余震は続いている。もしかしたらもう二度と会えなくなるかもしれない。でも、いつまでも学校を休むわけにもいかない。「後ろ髪を引かれる」といった言葉ではとうてい足りない。胸がつぶれる思いでペダルを踏んだ。思い切り踏み続けた。冷たく、激しい雨が顔にぶつかってくる。

道路は、あちらこちらで陥没していた。倒壊した家が道を塞いでいる。雨で目が痛い。前が十分見えない。気を抜くと転倒する。そんな中をただただ東へ向かって進んだ。

新神戸駅の南側で信号待ちしていたとき。小さなおばあさんが、私の横に並んだ。泥だらけのショッピングカート歩行器のようにして押していた。カートの中には、避難所からもらったと思われるジャムパンが3個入っていた。ずぶ濡れの私を見上げて、おばあさんは、黙ってパンを差し出した。

私の手は、素直にそのパンを受け取っていた。おばあさんが不自由な足で、雨の中をやっと手に入れたパン。そのパンを私はひとつもらった。パンをもらったのはまちがいだったかもしれない。断れば、おばあさんは、もうひとつパンを食べられたのに……。でも、わたしは、おばあさんのやさしさを素直に受け入れてよかったと思っている。

2時間半かかって駅に着いた。すぐにそのパンを食べた。ジャムの甘さが雨に濡れて冷えきった私の体を温かくしみとおっていた。



まやに間一髪。でも…

1月17日早朝、八尾の自宅で寝ていたが、大きな揺れで目が覚めた。隣で寝ていた妻が「何、これ」と声を上げている。とにかく布団の上でじっとしているしかなかった。1分ぐらい続いた揺れがおさまり、ふと火の元が気になり、1階へ降りて台所・風呂場のガスの元栓を閉めた。家の中を点検し、大きな損傷がないことを確認した。すぐにテレビをつけると、NHKでは、すでに地震の速報をやっていたが、大きな揺れを感じたということしかやっていず、神戸局内の揺れを写したビデオが流れていた。西宮の実家のことが気になるが、その時は眠さに負けて再び布団に入り寝てしまう。

7時頃目が覚め、再びテレビをつけるとNHKからの神戸支局の画面を放送していたが、テレビを見る限り被害の状況はほとんど分からない、というより、神戸や西宮であれだけの被害がでているこ

となど、ほとんど分からない。7時過ぎに実家のことが気になって、いたことを思い出し電話をするが、混み合っていてつながらない。その日が中国「帰国」生徒についての大阪府教委の視察が組まれていたので、とにかく学校へ行かなければならなかった。同僚のM先生から、視察の授業が1時間目だが、松原在住のため、市内の鉄道が止まっているようなので遅れるかもしれないとの電話があり、できるだけ早く来て下さいと言って電話を切った。8時まで実家に電話をかけ続けるが、相変わらず通じず、出勤時間が来たので、取りあえず自家用車で学校へ行く。家の玄関で初めてガラス製の花瓶がわれていることに気が付く。

8時過ぎに学校へ到着。学校へ行くと他の先生がほうきをもって掃除をしている。地震でガラスが大幅に割れたようであった。危険

個所のガラスを掃除し、ロープを張っている間に職朝の時間が来るが、そろっている教員は約半分、授業ができないので、急遽学活で対応することになった。一方で実家に電話を入れるが「混雑しています」「話し中」「誰もでない」の繰り返し。8時半に市教委の指導主事が来られ府教委の先生方が遅れるという連絡をうける。職員室で10時まで待機していたが、結局本校まで来ることができずに延期となる。その間に校長室でTVを見ている。阪神高速道路が倒れた様子などがヘリからの映像として放送されている。西宮という言葉が入れるが通じない。安否そのものを確認ができないというのが、こんなにいらいらするものか、とにかくいらががつづくが、どうしてもいいのか分からないので、取りあえず3・4時間目の授業に行くことにする。授業は一応やって

いるが、とにかく電話をと思うが、やっぱり通じない。事務の先生が、安否情報はNHKに電話してみれば放送してくれると電話番号をもってきてくれる。昼休みになり西宮に行くことに決めた。まだ八尾ではそんなにひどい状況であるという認識もまだなく、でもとにかく行つて顔を見れば安心するだろうと言うことで、半休を出していったん家に帰る。家の留守電に何か入っているかもしれないと言う期待もあつてかえったが、何も入っていない。どうして西宮に入るかを考えながらテレビを見ていると、地下鉄谷町線が東梅田まで通ったといっていたので、取りあえず、妻の学校に電話を入れ、何とかして西宮まで行くから今晩は帰れないかもしれないと伝える。東京の弟にも、連絡が取れないので西宮へ行く旨を伝えると、自分も電話を入れているが通じないのでよろしく頼むという。

相変わらず車が混んでいて、バイクはみんな歩道を走っている。

とにかく明るくする日の用意もある
でもう一度学校に戻る。親と連絡
が取れたかと分会のみんなは心
配してくれていたが、まだとこた
える。本当に行くのかという質問

に対しては、取りあえず高齢だか
ら家の片付けもあるからと答えた
で、どうやっていこうかという事
を考えているときに、みんなに聞
かれるので、取りあえず梅田まで

でと考えると答えると、それでは
たどり着けない、絶対バイクが良
いという。本気でいくんならバイ
クしかない……でも僕はバイ
クを持っていないし、原付はもう

8年も乗っていないから自信
がなくもしダメなら自転車で行こ
うとくらいにしか思っていないか
たので、ちょっと躊躇するが、同

僚がバイクを貸してくれると言う
ので同僚のU先生の家まで行き、
バイクを借りて八尾を出たのはも
う2時をまわっていた。西宮まで

の道順もみんな地図を調べてく
れ、日頃バイクには乗っていない
僕に対して、どんな服装が必要な
のかをいろいろと教えてくれた。

バイク用の服は持っていないので、
セーターにウインドブレーカーを
着込んでバイクで出発した。決め

た道順は、中央環状で長田まで出
てそこから中央大通りで阿波座に
出て、なにわ筋を通って2号線に
でる計画だった。

慣れないバイクで、とにかく2
次災害になつては大変なので、ゆ
っくりゆっくり入っていった。中

央環状は普段と少しも変わらない
混みぐあいだスムーズにはしって、
中央大通りに入ってもごく普通に
ある。船場を通過しているときも

ネクタイを締めたサラリーマンが
通過するだけで、普通の大阪市内
の状況と全然変わりにない。地震
があつたなんてほとんど分からな

い状況であつた。阿波座から野田
阪神の方へ抜ける頃から少しずつ
渋滞してきたが、まだ完全に止ま
るわけでもなく、横をすり抜けて

いく。野田阪神にでるまでは、八
尾から1時間半ぐらいだったと思
う。

野田阪神について2号線に入ろ
うとすると、2号線が混んでいて、
車はほとんど動かない。取りあえ
ず、コンビニがあつたので休憩し、

横を通っていく。バイクは段ボー
ル箱を積んでいるケースが多かつ
たが、店の配達でもするのになく
らいでとくに気にもとめていなか
つた。とにかくバイクの運転が8

年ぶりだったので、緊張してけい
ないようにバイクの列についてい
くのが精一杯、淀川を超え、神崎

川を越えて兵庫県に入った。兵庫
県に入っても特に景色が変わるこ
とはなかったが、救急車や消防自
動車のサイレンが時々耳につくよ

うにはなつていた。相変わらず車
が混んでいて、バイクはみんな歩
道を走っている。尼崎の中央あた
りに入ってビルのガラスが割れて

いて歩道にロープがはつてある光
景が少しずつ目にはいるようにな
つた。でも、まだコンビニや店は

開いており、もしかしたら食べ物
が足りないかもしれないと言う気
がしたので、コンビニへ向かうと
そのコンビニではもう食べるもの

はほとんどなくなつていた。これ
はまずいとその頃気がついてもも
う遅かった。取りあえず、自分が
朝から何も食べていないことを思

ゴミや瓦礫が散乱しているが、倒
れた家などはまだない。2号線の
武庫川まで後少しの所まで来た
とき、幸運にも居酒屋が一軒のれん

を出していたので、とにかくそこ
で止まり、食事ができるかと聞く
と、できるというのでとにかく入

った。電話があつたので妻の実家
(八尾)に電話を入れる。妻には
実家の方に行くようにと連絡を入

れてあつたためだが、実家にはい
ず、再び自宅の方に電話を入れ、
現状を報告する。野田にある母の

実家の母の兄(おじ)から電話が
あり、おじが自転車以西宮に向か
つたという伝言があつたことを知

る。とにかく、これから先食べ物
が食べられないかもしれないとい
う心配からおかずとご飯をしっか

り食べる。おにぎりでもと言った
が、水が少ししかでないで、ご
飯が炊けないので……と断られ
る。店をでて、開いているガソリ

程度。倒れている家はほとんどない。

20分ほど休憩して武庫川めざして2号線を走る。西宮は18年住んだ土地だから、武庫川を越えれば裏道も分かるので裏道に入ろうとおもい、武庫川を越え西宮市に入った段階で横道にそれるが、そこからまるつきり景色が違う。木造の家屋がぶれブロックの塀が道に倒れて転がっている。進もうとする道々が瓦礫でふさがっていて思う方向に進めない。西宮市内に入った頃はまだ明るかったのが、裏道を行っているとだんだん暗くなってきた。そのうち、方向を誤って、甲子園口の方に迷い込んでしまう。自衛隊の戦車のような装甲車が道をふさいでいるが、その向こうで大きな火の手が上がっている。これはまずい、と思い道を引き返す。まだこのあたりは、電気が来ていて、街灯があるので多少は明るかった。

1時間ほどあちこちを走り回って、やっと中津浜線(R2とR171をつなぐ道路)にたどりついた。ここまでた倒れた家の数は数えきれない。よいいなことを考

えずにとにかく自分が事故にあわないように家に一步でもちかづこうと必死だった。

中津浜線に入り、結局2号線から裏道に入らなかった方がよかったことに気がつく。ここまできても、まだ実家だけという気持ちには捨てきれない。家につけば両親がいるという希望を持っていた。中津浜線でJR東海道線と阪急神戸線を越えると電気がきていずまつくらになった。車道は車にふさがれているので、障害物を避けながら歩道を走る。やっと家の近くまで来たときにもう6時をまわっていた。いつも家に帰るときに使う住宅地の中の道を通ろうとしたのだが、家から100メートルくらいの所でまた家がくずれていて通れない。しかたなく引き返し、大きい方の道からやっと家の前にたどりついた。何とか家は建っていた。それだけで、下敷きにはなっていないと少し安心したが、あたりは真つ暗でだれも通らない。自分のバイクのヘッドライトで家を照らす暗くてよく分からない。どうやらだれもいないようである。大きな声で叫んでも誰も出てこない。おまけに、隣にあった2階建

ての家がなくなっている。本当は家のまわりだけ見ても地獄のような光景だった。しかたなく、ふと八尾でも近所の学校が避難場所になっていることを思い出し、母校の高木小学校の近くに行ってみる。何人かが電話に並んでいた。避難所はどこですかと聞くと高木小学校だと言う。十数年ぶりに母校にこんな形で足を踏み入れるとは思っていなかった。電気はもちろんきていず、体育館の扉が開いていて中で懐中電灯の光が光っていることに気がつき、体育館に入ると、足の踏み場もないくらいに人が布団や毛布にくるまって座っている。所々に懐中電灯の明かりがついているものの点々と明るいだけで誰がそこに座っているのかいっこうに見えない。ここで、やっと懐中電灯を忘れてきたことに気がつく。なんて愚かなんだろうと自分に情けなくなつた。真つ暗で親を捜そうにも人の形は分かっても顔はまったく見えない。入口から10メートル進んだ所で立ち尽くしてしまふ。暗いのと足の踏み場がないからだ。どうしようかと考え、ライターをもっていたので、それで自分の顔を照らすことを思

いつく。もし親がいれば、自分の顔を見て気づくかもしれない。ライターをあごの下でつけて少しずつ進んでいくと、小さい声で僕の名前を母親が呼んだ。声の方を見ると、人ごみの中で、両親と祖母の3人が布団にくるまって呆然としてすわっていた。3人の顔を見て本当にほっとした。生きてくれてよかったと思った。親も僕の顔を見てほっとしたようだ。どうやってきたのか、地震の時どうだったのか、をお互いに話をした。話の最中に体育館の照明がついた。体育館の中ではどこからともなく大きな拍手が起こった。

親の話を聞くと、寝ていたところから突き上げるようにゆれた後、大きく揺れが1分くらい続いたという。父親は起きていて揺れたときに布団をかぶってじっとしていたようだ。母親ははじめの揺れで飛び起きて壁際にいたのでとにかくすぐに柱の多いところに2メートルほど動いたようだ。そのとたん、隣の家がくずれてきて、母親が寝ていたところに厚さ5cmくらいのモルタルの壁が倒れてきたのだという。飛び起きて動いた

1時間ほどあちこちを走り回って、やっと中津浜線にたどりついた。

ことで傷一つ負っていなかった。まさに間一髪。でも、電気が止まり、電話は不通（電気がないと電話機が動かない）、夜明け前で懐中電灯を捜しに行ったそうだが、他の部屋では棚や洋服ダンスがたおれて、床にもものが散乱して見つけるのに1時間くらいかったそう。うだ。ちなみに両親の布団のまわりには倒れるような家具を置いていなかった。家具の下敷きにならなくてすんだらしい。1階で寝ていた90才の祖母は、ベッドから落ちたくらいで大きなけがもなかった。それで明るくなって、家の壁や天井がびびが入っており、壁に穴があき、壁も落ちていることが分かって、母親の決断で小学校に避難することに決めたという。もちろん避難所の情報とか連絡はなく、ほとんど勝手に小学校に乗り込んだ形だったが、もうすでに、学校の扉は開いていて数人の被災者がきていたそう。2階のなくなっていた隣の家では3人が生き埋めとなり、むかえの3階建ての鉄筋のアパートに住む若者が掘り起こして3人とも何とか無事だったそうである。しかし、その隣も全壊でそこは1人亡くなったとい

う話だった。で、祖母を連れて両親はとにかくいったん体育館に行った。まだそんなに多くの人は来ていなくて、そこへ祖母を置いてもう一度家に戻り、布団・毛布とパンと牛乳とミネラル水のペットボトルと貴重品のうちいくつかをもって避難所に戻ってきたというのだ。前日に買い物へ行って水とパンが少しあったおかげで、僕が行くまでの食料はあったらしい。ただそれも底をついてきていた。

ここまで話を聞いて、考えなしにひたすら西宮まで来た自分が情けなかった。せめて食べるものや飲むもの、電池、使いすてカイロなど、もう少し頭を働かせたらよかったと後悔した。来た途中で2号線でも店が開いていることが分かっていたので、何が足りないかと聞く。食糧と電池とジュースという。それと、親戚に電話を入れて欲しい、避難所の近くではなかなかつながらないと言う。そこでじっとしていても仕方がないので、もう一度バイクで2号線に戻ることにした。とりあえず、武庫川の手前の食事をした居酒屋をめざす。

電話を八尾に入れることが先決だと言うことで、八尾に入れてそこから妻に親戚へと連絡を取ってもらうことにした。店の主人にはこれから西宮へ行きますと話していたので、電話を使わせてくれると思ったからである。店にたどり着くためには、また西宮市内の瓦礫でグチャグチャの道を走って2号線に出なければならぬ。店にたどり着いたのは避難所を出発して1時間ほどたった7時半だった。そこで電話をいれると、バイクを貸してくれたU先生から電話があり、実家の車が動くようなら、車を置いてきてもよいから、とにかく両親を八尾に連れてこいというものだった。その他、友人など心配してくれた人から電話がたくさん入っていたようであった。状況を妻に伝え、親戚や友人に連絡を取るよう指示をして再びバイクで2号線を大阪方面に走った。途中スーパーやコンビニを覗くが食料品はお菓子や小麦粉などの食糧はあるが、弁当・パン・缶詰など調理が要らないものはすべて棚が空っぽになっていた。途中で隣を走っていた単車の人からパンクをしていると言われて、あわてて

スタンドにはいる。どうやら瓦礫やガラスの上を走ったためらしい。スタンドにはパンクした単車が3台すでに順番を待っていた。しかし、給油で混雑しているスタンドで結局1時間程度足止めを食うことになる。その間2号線は和歌山とか奈良の消防自動車行列をなして西へ向かっていっていた。スタンドでの待ち時間の間に八尾に電話をし、U先生にも連絡をして事情を伝えて、とても明日出勤できないことをつたえる。その際、とにかく八尾に連れてくることを強くすすめられる。

パンクが直り再び走り出したのは9:30。また大阪方面に走るがいく店行く店すべて売り切れ状態。24時間営業のコンビニも品切れで一時閉店という張り紙が多かった。そして走っていき、いつの間にか神崎川を越え淀川を越えて野田まで帰ってきてしまった。そこで野田に母親の実家があることを思い出し、家の場所を思い出しながら探し出しおじの家にたどり着く。午後10:30。叔父は、家まで自転車で行ったがおらず、高木小の体育館もさがしたが見つかることが

できずに帰ってきたということだった。状況を伝え、必要なものを伝えると叔母がおにぎりをつくってくれ、カップラーメンと魔法瓶にお湯を入れてくれた。それと使い捨てカイロとパンと下着をカバンに入れてくれた。とにかく実家の車が動かなければ電話しますと約束して、バイクに積めるだけ積んで午後11時に野田を出発した。

深夜で歩行者がほとんどいないので、ほとんど歩道を走っていた。正確に言うと2号線には歩道と車道の間に自転車専用のラインがあるのでそこを走っていた。避難所に再びたどり着いたのが午前0時。單車を置き荷物を運んで両親の横に座った。今すぐ車をだして八尾に行こうという、どうしても持っていかなければならない書類があるので、明るくなつてからさがしたいと父親が言うため、明るく朝に八尾に行くことになった。おにぎりを食べながら、長い1日が終わり避難所での一夜をすごすことになった。(1/17 終わり)

避難所に戻ってから、途中で買ってくるはずだったホットの缶コーヒーを買い忘れたことを思いだ

した。母親はだいのコーヒー好きだが、当然の事ながら朝から一杯も飲めていない。それと、避難所である体育館が暖房設備がないことがわかっていたので、何とか温かい飲み物を飲みたいということから、野田からの帰りに自動販売機で買って来るつもりでいた。しかし、避難所についてからそれを感じ出した。それと、父親から親戚と連絡が取れたかどうかを確認して欲しいと言うことと、野田のおじに無事ついたことを伝える必要があったため、もう一度避難所をバイクで出かけることにした。夜中の0時半であった。出発前に学校には電気がついていていたものの学校のまわりはまだ真っ暗だ。緑の公衆電話も停電のために避難所では完全に止まっており使用できないので、また、もと来た道を走ることにした。来る途中で中津浜線の東側までは電気が来ていたことを思い出し、中津浜線で家と野田のおじに電話をする。野田の叔父には、実家の車は動きそうなので明日に自力で出発してみると伝える。妻には親戚や友人との連絡と翌日の年休の手配をたのみ電話を切る。そこからホットコーヒー

をさがして市内東部を走るが、当然停電の区域では自動販売機は動いていないので、街灯がついているところをめざして走っていった。やはりどの方向に向いて走っても、倒れた塀や家、電柱などですぐに道を阻まれてしまう。また、幹線沿いの自動販売機を数台見つけるがすでに「売り切れ」状態。1時間ほど走って、やっと高架橋の下の人目に付かないところの自動販売機を見つけ、ホットの缶コーヒーを5本買い込み、避難所に戻った。

避難所に戻ると、親からおにぎりの配給があったことを聞かされた。暖かい大きなおにぎり、どうやら高木小の教職員が炊き出しをやっているらしい。しかし、そのおにぎりもとても全員にはあたらなかったようだ。避難所に戻ってやっと寝る体制を整えた頃、再び、さつきあたになかった方にということでおにぎりがいくらか配られたが、それも1分ぐらいで売り切れてしまった。

取りあえず、買ってきたコーヒーを飲みながら明日の運転の備えて寝ようと思ひ横になったが、興

奮してなかなか眠れない。やっとうとうとしたと思ったら、また地面がゆれる。体育館の中では悲鳴が上がり、一瞬騒然となる。これは半時間毎に続いた。ラジオをもっている人が交代でNHKの放送をかけている。が、とても動きまわる元気がなく、みんなぐったり座ったままだ。僕も半日の慣れないバイクの運転で疲れて休みたいのだが、とても落ちついて寝てられない。また、30分おきぐらいに体育館に人が訪ねてくる。やっとうとう西宮まで来た親戚が肉親を捜しに来ているのだ。××の○○さんいますか……と呼び出しが続く。その頃には体育館に入りきらずに校舎の教室や廊下に避難している人も多く、順番にまわってさがしているようだった。あらためて、自分が親と避難所に来てすぐに会えたというのが幸運だったというのがわかった。また、今度はヘルメットをかぶった人が「××町×丁目の○○さんはおられますか、ご存じの方はいませんか」と大きな声で呼び出しをやっている。これは高木小の校区である西宮北口周辺で多くの家が倒壊したために、まだたくさんの方が生き埋めにな

家にはいる。とてもこわい。余震が続いているし、もし家の中に……

っている。倒壊した家の住宅地図をもとに誰の家かを確かめ、そこに何人いてその人は助けられたのかまだなのか、それを確認に来ているのである。必死で掘り起こしているようだが、人手が足りず生き埋めの人がいるとわかっているところからとにかくやっているようだ。「××さんのおばあちゃんはまだ埋まっていたか?」「まだです、がいします」大きな声で体育館の入口と奥との間を横切り、体育館中に響く。この繰り返しの途中でほとんど寝ていられない。うとうとすると余震で目が覚める……そんな夜だった。結局寝れずに4時半に起きた。体育館の外でタバコをすっていると新聞やさんが朝刊の配達に自転車できた。配る家がないので避難所に40部ぐらいづつもってきて、体育館の入口に積んでいき、避難しているものが自分ですべて回して読む。そうこうしているうちに夜が明けていく。

明るくなったら家にいって貴重品だけを出して車でとにかく八尾に行くことを打ち合わせていたので、祖母を体育館に残し両親と3

人で実家に向かう。前日は真っ暗でほとんど見えなかった実家のまわりが相当ひどい状況であることをあらためて目の当たりにする。

家の前のアスファルトの道はアスファルトが切れて10センチぐらい盛り上がりしている。その道路は、ほんの20メートル先で木造の家が倒れ、それ以上先は見えない。実家はかどだがもう一方道も20メートルくらいで同じようにふさがっている。隣の家の2階が実家の1階の壁を直撃し、2階の壁には隣の家の柱が突き刺さっている。突き刺さっているところはちょうど母親が寝ていたところだ。とにかく、自分が小学校から高校まで過ごした近所はなくなっていた。そんな中で築35年のうちの家が建っていることそのものが不思議だった。とりあえず、U先生から借りたバイクは庭においておくことにして、植木の間に停める。

家にはいる。とてもこわい。余震が続いているし、もし家の中にいるときにゆれて家がくずれてきたらどうしようという恐怖だ。地震があつてちょうど24時間ぐらいが過ぎていた。両親の言うとおり、洋服ダンス・和ダンスなど、ほと

んど倒れ、天井や壁にはクラックが入り、床には落ちたものと壁とでぐちゃぐちゃ。台所では食器が割れて散乱し、とても靴を履かすに入れない。打ち合わせ通り、分担したものをさがすが、家が傾いているのか、押入の戸は開かない。床にはものが散乱し、あるはずの所がない。それでも15分ぐらいか、どのくらい時間がかかったのか、

本当に覚えていない。時計を見る時間もなく、とにかく焦って荷物を数点だし、一方で車の上の瓦礫をカバー毎よけてエンジンをかける。エンジンがかかった。ボディには落下物のためへこみ、車の1m後には隣の家のくずれた瓦礫がなだれかかつてはいたが。とにかく車に貴重品を積み、道がないので一方通行を逆行して祖母のいる高木小にいったんいった。ラジオで2号線が救援物資のため通行止めになっている事を知り、R171から池田に向かい中央環状から八尾に来るルートにした。問題は武庫川の171号線の橋だったが、10センチくらいの段差があつたくらいでその日の午後には八尾にたどり着くことができた。

それ以降、阪急電車が西宮北口

まで開通し、やすみ毎にビニールシート掛け、両親の衣類等の荷物の運び出しを、リュックサックをかついで行なっている。

亡くなられた方のご冥福をお祈りします。